

「森・海・いのちの営みに学ぶ～仕事の連鎖、百年の展望～」

日時 2008年12月20日(土) 13:30～17:00

場所 富山タワー111(インテックビル)スカイホール

特別企画 「日本の四季、日本の心を歌う」

上市町在住のバリトン歌手、内山太一氏の独唱でオープニングに彩りを添えていただいた。ピアノ伴奏は内山節子氏。演奏曲目は以下のとおり(ただし、各曲1題目のみメドレー形式にて)。

一 朧月夜 作詞 高野 辰之 作曲 岡野 貞一(文部省唱歌)

1914(大正3)年6月、『尋常小学唱歌(六)』に掲載された文部省唱歌です。日本の田園風景をつづった格調高い歌で、かの唱歌の傑作『故郷』を世に送り出した高野・岡野コンビの代表曲でもあります。戦後になって作詞者が明らかになりましたが、高野の生家、長野県長峰地区の風景を歌ったと言われています。また、鳥取市の岡野の生家のそばには音楽碑があります。

二 われは海の子 作詞 宮原 晃一郎 作曲 未詳(文部省唱歌)

1910(明治43)年『尋常小学読本唱歌』に掲載された6年生の文部省唱歌です。海をテーマとした有名な唱歌で、かつては7番まであり、ラストは海洋国・日本を軍艦で守るのだという内容でした。1943(昭和18)年の『初等科音楽四』まで掲載が続きましたが、1947(昭和22)年版以降は4番以下が削除されました。

三 里の秋 作詞 斉藤 信夫 作曲 海沼 実

1941(昭和16)年に『星月夜』としてつくられた作品で、戦後軍事色の強い3番をつくり変えて現題とし、1945(昭和20)年12月、NHKラジオ『外地引き揚げ同胞激励の午後』の中で、川田正子が歌い全国に向けて放送されました。放送直後から多くの反響があり、翌年に始まったラジオ番組『復員だより』の曲として使われました。

四 冬の夜 作詞・作曲 未詳(文部省唱歌)

1912(明治45)年、『尋常小学唱歌(三)』に発表された文部省唱歌です。冬の雪国に暮らす両親と子どもの姿を描き出した歌で、ともしび、縫い物、囲炉裏という、もはや今の日本では消えつつある文化が象徴的に並べられています。きたるべき春を語る母、かつての戦争の功労を語る父、そして外は吹雪という対比が叙情的な雰囲気醸し出しています。

五 赤とんぼ 作詞 三木 露風 作曲 山田 耕作

三木露風が北海道函館附近のトラピスト修道院において講師をしていた頃、幼少時代に見た赤トンボの風景や自分を背負った子守娘を思い出して描いたものとされています。1921(大正10)年8月、『櫻の実』に詩が発表され、1927(昭和2)年『童謡百曲集第二集』で山田耕作が曲を付け、1931(昭和6)年にレコード化されました。1947(昭和22)年版では3番が削除されました。

第一部 基調講演

「仕事とは何か、そしてどう変わってきたのか～山里の暮らしからの考察～」

講師 内山 節 氏（哲学者 立教大学院教授）

ご紹介いただきました内山です。仕事の話をしよとうということになりますと、ご承知のように今日は大変厳しいいろいろな条件下にあって、毎日ニュースを見ると、派遣労働者が解雇された等々の話が出ているような時代になってまいりました。今日はその話をしよとうと思ってきたわけではないのですけれども、私たちももう一度覚悟をし直さないといけない時代に入ってきているような気がいたします。それともにもう一度、大元のところからわれわれにとって仕事とは何だったのかということ問い直していかないといけないという時代でもある



ような気もします。これから、多分来年（2009年）はもっとひどくなっていくのでしょうか。緊急事態が発生したような状態ですから、早急に打たなければいけない対策は数々あるのですけれども、同時に根本から考え直していかないと、こういうことがこれからも繰り返し発生していくという時代でもあろうかという気がしています。

私の[レジュメ](#)の最初に、「労働の目的は自己実現なのか」という書き方をいたしましたけれども、近年は自己実現という言葉が随分いろいろなところで使われてきたような気がいたします。これは本当に疑ってみななければいけないなと思っているのですけれども、現在の世界の経済の混乱でも、自己実現を目指した人たちが国際的な金融市場を作り上げて、それが今は破綻してきているというのでしょうか。ニュースなどでも明らかなように、アメリカの金融機関の社長、会長を歴任した人というのは、この数年間だけで年俸が延べ500億円という人もいたわけです。自己実現をしてきたことは確かといえますが、しかし、本当にこれでは、個人の自己実現が世界に多大なる迷惑をかけるという現実もまた作り出してしまったわけです。

労働の目的は、個人が何かを目的としてやることだったのだろうかという、根本にはこの問題があるような気がいたします。そうではなくて、一つの社会の中で一人一人が役割を果たしていくという側面の労働がだんだん忘れられてきている。個人の目的を成し遂げていくというのが労働だという、時代の在り方そのものが問い直されなければいけないときにきているような気がしています。

先ほどご紹介いただきましたけれども、私は40年も近く前に、正確にはあと2～3年たつと40年ですが、そのころに群馬県の上野村という所に魚釣りに出かけていきました。小さいころから魚釣りを趣味にしており、二十歳ぐらいからはヤマメとかイワナという釣りにほとんど特化されたような釣りをしていましたので、上野村にもそんな感じで参りました。

上野村といっても分からない方がほとんどだと思っておりますけれども、8月になると日航機が落ちたというニュースが必ず出てくる村です。ニュースでご覧になっているかと思いますが、大変な山の中で、村中に水田が一枚もないという村ですので、山村の中でも水田が全くないというのはかなり珍しい村ではないかなという気がいたします。ただし、それほど貧しい村だったわけではなくて、昔は養蚕を中心にして結構裕福とは言わないけれども、それなりにしっかり暮らしてきた村でもありました。貧しいという話をするなら、今が一番貧しいかもしれないという村でもあります。

ちなみに人口が1500人ほどの小さい村です。昨今の市町村合併の話も、うちの村自身は合併する気が全くない村で、私も村におりまして、合併しようという話を聞いたことがないので、ほとんど村の満場一致で合併はしないというので、今でもそういう方向で頑張っている村でもあります。

この村で私もいろいろなことを教えてもらったのです。その中には畑の作り方とか、山の木の切り方とかもありますけれども、物の考え方でもいろいろなことを教わりました。その一つに村の人たちが毎日何気なく使っている言葉に「仕事」と「稼ぎ」という言葉があって、この「仕事」と「稼ぎ」とが明確に分けられているということに気が付いて、何を基準にして分けるのかということをお村の人たちに随分質問して教えてもらったことがありました。

実は非常に簡単なことで、村の暮らしを作っていく上でそれぞれが役割をこなしていくものが「仕事」である。だから、「仕事」の中にはお金になる仕事もあるけど、お金にならない仕事もあって、例えば畑仕事とか山仕事とかということになりますと、出荷したりすれば幾らのお金になってくる。ところが、こちらでも農山村に行けばあると思いますけれども、村では結（ゆい）のような形でみんなで道を直したり、いろいろなそういう仕事もあります。これもまた「仕事」で、当然ながらお金には一切ならない仕事です。

それから、各集落ごとに定期的、または課題がある時に寄り合いを持って会合を開き、方針を決めます。僕のところで正月の1日に第1回の会合があって、そこで1年間の基本方針を集落で決めるのです。こういう寄り合いも村を守っていく上で欠かすことのできない仕事ですから、やはり「仕事」といわれます。

あとは隣のうちにちょっと困っている方がいる。だから、ちょっと応援に行くというのも「仕事」です。今だとボランティアとか助け合いとか、いろいろな言葉で言われるようなものも含めまして、村にはいろいろな「仕事」がある。その「仕事」は自分たちの地域社会を守っていこうとするときにいろいろな役割があって、その役割の中に畑仕事があったり、時には結（ゆい）でみんなで道を直したり、それから、時には隣近所で助け合ったり、そういうようなことを総称してうちの村では「仕事」と呼んできています。

それに対して「稼ぎ」は何かといえますと、「稼ぎ」の場合は言葉どおり稼ぐことが目的ということです。ですから、収入が動機になって行方ものです。これは地域が単位なわけではなくて、各家々

が単位といたしますか、あるいは各個人が単位といたしますか、自分の生活を作っていく上で少し稼がなければいけないからという動機で行われていくのが「稼ぎ」です。

うちの村では「稼ぎ」も決して軽視はされていないわけで、「稼ぎ」も大事だからしっかりやらなければいけないといわれているのですけれども、やっぱり「仕事」よりは少し地位が低いといえますが、「仕事」はもっと大事なものとわれてきました。当然ながら、ある程度「稼ぎ」がないと生活が成り立たなくなりますし、生活が成り立たなくなれば村から出ていく人たちも増えてしまいますから、「稼ぎ」もしっかりしよう。これは決して軽視はしない。でも、それ以上に「仕事」はしっかりしないとイケない。「仕事」が壊れていくと、村という地域社会が次第に壊れてしまうというのが私たちの村の基本的な考え方みたいなものでもあります。

ただし、非常に微妙なものはたくさんあって、例えば「畑仕事」があるのですが、同時に「畑稼ぎ」というのがあって、外から見ていると同じことをやっている。土を耕して、種をまいてということをしているわけですから、同じことをやっています。ただ、村にいとその違いは明確に分かってきて、村の暮らしの中で昔から畑を耕しながら生きてきた。こういうものを大事にしながら村の暮らしを作っていくという、これが「畑仕事」なのです。

それに対して「畑稼ぎ」の方は収入が出発点になって、この畑から例えば100万円の収入を上げようと考えた。そうすると、どういう農業をしたらいいかというのを考える。うちの村ですと、多少収入になる農業関係だと、これを農業とっていいかどうか分かりませんが、一番大きい収入はキノコ栽培です。二つ目はプラムなどの若干の果樹栽培があります。三つ目に夏の切り花栽培というのがある、お盆のころによく菊の花などを出荷しています。ちょっと標高が高くて寒いので、気候的にはそのころに菊を出荷するのに比較的適しているということでもあります。

だから、畑を使っている農業ですと、「畑稼ぎ」としては大体切り花栽培が中心になっている。そうすると、当然ながらこれは高く出荷されなければいけませんから、栽培の仕方でもうやたら高く売れるかというのを基本に置いた栽培の仕方になっていきます。特に切り花というのは、うちの村もたくさん作っているからあまり悪いことは言いたくないのですけれども、当然ながら切り花は花屋さんから買ってきて、切ったりして活けます。切り花を触ったらすぐ手を洗いましょうと言いたくなるくらい農薬を使っております。

これは食べ物ではありませんので、大量に使っているといたしますか、なぜそんなに使わなければいけないのかといたしますと、例えばアブラムシが付いて葉っぱに一つ茶色い点の染みが1個できたり、あるいは葉っぱの端っこにちょっと枯れたような部分が1ミリぐらいできたり、そんなことが起きただけで価格は10分の1ぐらいに低下しますので、きれいな真っ青な葉っぱが全部付いていないといけないという条件があります。ですので、毎日農薬を散布するという農業です。耕作面積が狭いからいいのですけれども、もし大規模にやったら別の問題が発生すると言いたくなるような農業

でもあります。

それから、首の長さというのですけれども、最後の葉っぱと花との間の茎の長さが長すぎても安くなりますし、短すぎても安くなりますので、適切な長さで花が付いていないと出荷価格は大変ダメージを受ける。これはホルモン剤を使って調整をいたします。ですから、成長促進ホルモンを使うか、抑制ホルモンを使うかという工夫をしながら、まさに一番高い値段で売れる切り花を作ります。そういうものですから、間違っても菊の葉っぱが余ったからお浸しにして食べようなんていうのはとんでもない話で、むしろ触ったら、活けたらすぐきれいに手を洗いましょうと言いたくなるぐらいのものです。

結局、「畑稼ぎ」ですから、収入が動機になって、その目的の収入を上げようとするすると勢いそういう農業になっていくということです。私たちはそれを否定はしていなくて、先ほどから言っているとおりです。そうやって多少でも収入があるから地域社会が維持できているという一面があります。それから、また、広大な面積の中の点のような形でしか行われておりませんので、「まあ、いいか」ということになっているのですけれども、「稼ぎ」というのはそういう面ももっているのです。

それに対して、「畑仕事」は地域とともに自分の役割をこなしていくように農業をやることですから、そんなむちゃくちゃな農業はやりませんし、また、地域に適したもの、自然に適したものを作りながら、こちらの方は仕事とともに会話があったりする。村におりますといつもそうですけれども、「今年はどうだ」という話をみんなでやり合いながら、まさに地域とともにある農業といえますか。こちら側が「畑仕事」ですから、村におりますと「仕事」と「稼ぎ」の区別はかなり明確に見えてきます。

私がこの「畑仕事」「畑稼ぎ」というのを聞いていて、これが区別できる社会だということがいいなという気がいたしました。都市部の仕事でも自分の役割をこなしていくという部分と稼ぐという部分の両方が間違いなくあるのだと思うのですけれども、その境界線がだんだん見えなくなっている。それからまた、今日のニュースになっている派遣の人たちを見ても分かるように、「仕事」という部分がほとんど消えてしまっていて、「稼ぎ」しか存在しない労働といえますか、そういうものもまた大量に発生してきている。ここをはっきり見分けながら生きていくことができるというのは、とてもいいような気がしています。そういうことを村で教わったりしながら考えていきますと、現代社会、あるいは近代・現代社会と言った方がいいのかもしれませんが、その労働というのはある種異常さを持っているような気がしてきます。

私も村で、150 坪ぐらいですから坪で言った方がいいのですけれども、農業をやっております。150 坪というとちゃんとした農村に行けば笑われてしまうのですが、うちの村の方では耕地が本当に少ないですから、そんなに笑われるほど狭い面積ではございません。時々畑に出ておりますと、村の人が横を車で通ってぎゅっと止まって、「ここでおたくはやってたのかい」なんて言いながら

のぞいていたりする。1年に一度ぐらい「おたくは随分手広くやっているね」と言われることがあってびっくりしますけれども、うちの村というのはそんなところがあります。

僕のところは出荷しているわけではありませんので、自分が食べる分とあとは友人にあげたりするような使い方の農業です。そうすると、例えば夕方に家に戻るときにネギを1本か2本抜いて、これをおかずにしようということになったりします。東京でしたらスーパーで例えばネギを買ってきて、家に持ち帰ってから料理が始まるのですけれども、村ですと畑から引っこ抜いたところから料理が始まったという感じもする。しかし、そもそもネギを作っている期間が、ネギは2年近くかかりますけれども、ネギの種をまいたときから実は料理が始まっているという言い方もできて、一体どこが労働で、どこが消費とか、生活領域なのか、ほとんど区別がつかないというのが現実でもあります。

例えば僕のうちのすぐ庭のわきが山になっていて、それが都合のいいことに自分の山になりますので、山の入口にタラの木なんかを植えたりして、これは当然ながら春に採るためのものです。あるいはワラビもそこにちょっと植えたりして、山ウドも植わっていますけれども、手軽に採れるようにしているのです。そうすると、植えるときから、これは自分で食べようと思って植えているわけですから、植えて、食卓に上がる作業が一連のものといえますが、もともと労働というのはそういうものだったのだろうという気がいたします。

上野村というのは群馬県ですけれども、群馬県では明治になって富岡製糸場という官営製糸場ができて、近代産業が芽吹いてきます。そのときに群馬県では農民の指導者といわれた人たちが何人か発生してきて、その人たちが明治期の群馬の農民を引っ張ったといいますが、そういう時代がありました。そのときにその指導者たちが共通して言っていた言葉が、「労働と生活は一体でなければいけない」ということでした。だから、農民は勤めに出てはいけないということを盛んに指導者として主張したのです。

だけれど、それで生活ができなくなってしまったのではしょうがありませんので、どうやって農業に付加価値を付けて、家内工業的な要素を含めて収入を確保していくか。群馬県というのは養蚕地帯ですので、それは高品質な生糸をどうやって作るかという運動ともなっていたのですけれども、とにかく農民というのは自分のうちから離れてしまっただけとはいえないのだ、離れてしまうと、労働と生活が分離して、それは家族の在り方も変えていくし、いろいろなものを変形させていって、結局、農村を壊してしまうことになるということも盛んに主張した指導者が何人も発生してきました。

村にいとこの人たちの言ったことがよく分かるような世界がまだあって、労働と生活が離れていないといえますが、結局、こういうのを見ながら、私たちが労働とは何だったのだろうかというのを考えると、何かを作り出していくというさまざまな労働があったのではないかという気がして

まいます。実は労働はどんな規定を加えてもいいのです。なぜかという、労働という意味が定まったから始まったのが労働ではなくて、労働は人間の発生とともにもうやっていたわけです。やっていたものをどう見ていくかということが労働の考え方ですから、労働とは何かというのはどんな答えを作っても構わないのです。

そういう視点で考えてみますと、私自身は労働とは何かを作り出す行為という単純な規定が一番ふさわしいような気がしています。そういう規定をなぜするかというと、そうすると私たちの労働というのは非常に大きいものだということに気が付いてまいます。だから、家の中でも常に何かを作り出していく。それは夕飯を作るということでもありますが、それだけではなくて、家族という人間関係、それ自身が絶えず再生産されているわけです。その家族を作っていく、絶えず作り続けられていくという、これもまた一つの労働です。また、地域社会では地域を作るという労働があります。これは都市部では大変弱くなってしまいましたけれども、伝統的な農山村、漁村に行けば今でも続いているような地域を作る労働というのがいろいろな形で展開している。

時には自然を作るという労働もあっていいし、それから、もっと言ってしまえば、さまざまな人間関係を作っていくというのも一つの労働だと僕は思っていますので、友達関係でもいいし、そういう絶えずいろいろなものを生み出しながら私たちは生きてきた。そこに一連の労働の流れみたいなものが、あるいは労働の体系があって、その体系の在り方は地域によって異なるものがあつたけれども、その中にいろいろな労働があつてこそ全体の労働の世界があつたのだという気がします。

ところが、近代になってきて、近代産業が発生してくると、いわゆる経済的な意味で生産的な労働といわれたもの、つまり、市場において価値を生み出す行為、それだけが労働として特化されてしまつて、それ以外のものが労働から抜け落ちてしまつた。そのことが果たしてどうだったのかということも、もう一度問い直していいような気がしています。

そういうことを考える上で、私は「広義の労働」と「狭義の労働」という言葉を使っていて、いろいろなものを作り出していく幅の広い、大らかな労働の世界を「広義の労働」と呼んでいて、それに対して今の市場で価値を生み出されるような経済的労働を「狭義の労働」と呼んでいます。だから、「狭義の労働」を否定しているわけではないのですけれども、「広義の労働」に包まれて、その一つに「狭義の労働」があつたのが昔のかたちだつた。それは上野村でいえば、「仕事」の世界があつて、しかし、「稼ぎ」の世界もあつたといえますか、それと同じことだという気がします。

ただ、現在になってきますと、私たちは「狭義の労働」の部分だけに頼って生きるようになってきている。それが破滅していくと大変なことになってしまうという時代を迎えたような気がしています。やはり私たちは今の時代の内部に生きておりますので、そうするとこの時代に起きていることが普通のことといえますか、当たり前のことと感じられたりします。ただ、もう少し大きい視野で物事を見ていこうとしたとき、これは果たして当たり前なのかということは絶えず問わなければ

いけないような気がしております。

私は最近、宮大工さんといわれる人たちとも親しくしているのです。例えば法隆寺というお寺がある。あそこの講堂ですけれども、大体700年ごろの創建ですから、1300年ちょっと前ぐらいに建てられたという木造建築です。これは木の力がすごいなということも確かにあるのですけれども、木造建築が長期にわたって続いていけたのは木の持っている力だけではないのです。というのは、木造建築は繰り返し補修をしていくことによって続いていくのです。

ああいう国宝級の建物がどんなふうに維持されていくかといいますと、200年から300年に一度ぐらい完全に分解してばらばらにします。木造建築の良さというのは全部分解できるというところにあって、柱も土も壁も全部壊して、全部本当にばらばらの部品にしてしまいます。土は崩したときに全部集めておいて、もう一度練り直して再利用するのです。分解しますので、一本一本の木を全部吟味して、もし取り替えた方がいい木があると、同じ質の木を持ってきて、それを取り替えるという作業をします。近年では唐招提寺がそれをやりました。昨年(2007年)あたりは唐招提寺がなかったといいますか、全部分解されていた。ほぼ修復が終わりましたのでそろそろ形は元に戻っていますけれども、そんな状況になっています。

それとは別に50年から100年ぐらいなのですが、分解はしないけれども、宮大工さんたちが入りまして外から見るといいですか、それを見て、ちょっと傷んでいるところがあると、そこを修復したり、取り替えたりいたします。ただし、この場合には分解しておりませんから、柱を1本変えてしまうということとはできないのです。どうしても柱の下の方が腐ってきているなんてことがあります。両側から少し持ち上げておいて、下だけを切って継ぎ足すといいますか、そんな形の修理をすることもあります。

ついこの間、僕は京都に行ったのですが、ちょうど東本願寺がその時期に来ていて、修理中の建物をのぞかせてもらったのですが、ほとんど問題はなかったということのようです。ただ、一本腐っている梁があって、宮大工さんが補修材を当ててちょっとごまかして修理していました。分解しませんから、それは交換できないのです。ですから、当てて修理をしていく。これで間違いなく100年は持つので、次の100年目にもう一度これを点検していく。そのときにこれがまだ難しいということだったら、もう一度補強しておく。その次の100年後が分解修理になるので、最初から300年後になるのです。200年後にもう一度分解をするので、そのときに取り替えればいいのかというのが宮大工さんの判断でした。だから、それまで100年ずつ持つようにしておけばよい。あとの部分は問題がないので、ちょっとした本当に簡単な修復で、主に屋根瓦の取り替えが中心でしたけれども、何とかなるでしょうということでした。

ちょっと腐っている梁ですが、東本願寺の建物は幕末の戦争、蛤御門の変で燃えてしまいまして、今の建物はまだ100年ちょっとなのです。そのときに材木が足りなかったらしくて、その梁は化粧

用の梁、つまり、屋根裏で見えない所に使っている梁ではなくて、表面に梁の形で見えている梁だったので、ちょっときれいな梁を使いたいという意図があったみたいなのです。ところが、こんなに太くて、長い松の木がなかなか見つからなくて、当時材木集めにちょっと苦労したみたいです。

その梁がどこから来たかといいますと、新潟から来ております。新潟の阿賀野川の氾濫原から来ているといいますか、阿賀野川が氾濫を起こしたときに上流の木が流されて、土埋木の形で土の中に埋まっていたのを掘り起こして、それを京都に運んで梁に使った。だから、その木は掘り起こしてからはまだ100年ちょっとしかたっていないのですが、今回、炭素法で調べましたらば、倒木をして、つまり、倒れて、多分濁流に流されて埋まったのが2000年前という木です。千八百何十年間土に埋まっていたのを掘り起こしてきて東本願寺で使ったというので、やはりさすがに100年ちょっと使ったら傷みが激しくなってきた、それでも少し補強しておけばあと200年は持つということのようです。

つまり、日本のこの技術が木造建築を維持してきたのです。もちろん、阿賀野川に埋まっていた木もそうですけれども、2000年前に流された木が使えるというのもすごいわけです。木にそういう力があるということは確かですけれども、絶えず人間が修理技術を持っている。簡単に言ってしまうと、法隆寺創建当時の技術がいまだに伝えられている。だから、法隆寺でも直すことができるということです。このすごさといいますか、1300年間技術が伝わってきたすごさです。これこそが日本のすごい木造建築を維持してきた原因でもありました。

ちょっと話が横道になってしまったのですけれども、もともとの労働とは何だろうか、仕事とは何だろうかという、一人一人が役割をこなすことによって成り立っている。お寺の修復ということになると、もちろん宮大工さんも必要ですが、それ以外に左官屋さんも必要になってくるし、瓦屋さんも必要になってくる。それから、その人たちに道具を作る職人さんたちがまた重要になってきて、そういういろいろな人たちが役割を果たして、全体としてそういう建物が維持されている。しかも、そこでは千何百年と技術がずっと伝承されている。だから、昔の技術が今でも使えるという体制になっている。そういう基盤の上に、「これはちょっと腐ってきたけれども、200年後に取り替えばいいや、それまではこういう形でちょっと補強しておけば大丈夫だ」と、そういう会話をしながら修理の仕事が成り立っていく。

こういう労働の世界と比べますと、今の市場の労働の世界というのはやはり異常だと思わざるを得ないような気がします。現在行われているのは、市場を通して戦争をやっていると言ってもいい。先ほど言った例えば宮大工さんの仕事の場合でしたら、一人ずつの仕事が結ばれながら全体の仕事が成り立っている。そこには、先ほど言ったとおり、大工さん、左官屋さん、瓦屋さん、いろいろな人たちがいて、もちろんふすまの人とかも、ありとあらゆる人たちがいる。また、その背後にはありとあらゆる道具を作る人がいて、同時にそれが支えられていくためにはお寺とか、そういうも

のが機能していなければいけないし、そしてまた、そこにお参りする人たちが常に絶えないようになっていくということがそれだけの仕事を可能にしているわけです。

そういう実際に仕事をしている人だけではなくて、いろいろな人たちがそれぞれの役割で支え合って全体の労働体系を作り維持されている。だから、ここには一人も勝つ人もいないし、負ける人もいない。つまり、全員が役割をこなしていますから、別にそこでやったからといって勝ったという関係ではないし、また、そこで負けたという人も出てこないわけです。

ところが、今の仕事の世界を見ていきますと、絶えず勝ち負けというものがあって、市場で戦争が行われていて、結ばれてみんな役割をこなしていくという仕事ではなくて、個別化された商品価値をそれぞれで追いつけて、最終的には価値量が貨幣として表れてきて、そして、さらに言ってしまうと、この世界では絶えず経済成長が続かない限り安泰ではない構造になっている。

例えばGDPが1%減ったとか、2%減ったなんていうのは、私たちはものすごく無駄な生き方をしていますから、1%や2%減ったってどうってことないでしょうという気がするわけですがけれども、こうやってみんなが競争しながら足を引っ張り合いながら勝ち組と負け組を作ってやっていく社会は全体のパイが常に増え続けていかないと、その争いが今度はマイナスに過大に回ってしまう。だから、安定するためには、常に増え続けなければいけないという経済を作った。それが今は破綻してきているときなのだろうという気がしています。結局、みんな市場で争っていくことは自分たちの支配圏を作り出していくことです。シェア争いなんて全くそうです。シェアを伸ばしていく、自分たちの支配する世界を広げていくということです。

アメリカのGMとかが大変ピンチで、昨日政府が幾らかお金を出すとかが、幾らかといっても1兆5000億円とかいう金額ですが、出すとかいう話がニュースに流れていましたけれども、あれでちょっと立ち直ると誰も思っていないのではないのでしょうか。そのときにふと思い出しますのは、アメリカというのは、あまり鉄道が発達していない国で、車がなければいけないという国です。しかし、かつてのアメリカというのは鉄道大国といわれるぐらいたくさんの鉄道があったのです。それが廃線になってつぶれていったという歴史があるのですけれども、経済競争でつぶれたわけではないのです。どうしてつぶれたかという、自動車会社が鉄道会社を軒並み買収したのです。買収してつぶしたのです。つまり、車を売るために鉄道会社を買収して解散させたといえますか。それで、車がなければ生活できない社会をつくったというのがかつてのアメリカの歴史です。

つまり、支配圏を広げていく過程では、例えばこういうことが行われてきたのです。そのことによって世界最大の自動車会社が発生していった。結局、そういうことをやりながら、私たちの世界から過去の営みの記憶というものを消し去っていった。例えば先ほど言った宮大工さんたちがやっている仕事もそうですけれども、恐らく私たちはかつてはみんなこのような結ばれたな世界で生き、仕事をしてきたのだらうと思うのです。宮大工さんほど特殊な労働ではなかったかもしれないけれ

ども、みんながいろいろな役割をこなしている。そのことによってどこかで結ばれて一つの社会ができているという時代の記憶が、いつの間にか私たちの記憶から消されていってしまった。

現代では、労働することは、どこかに働きに行き、お金を得ることで、そして、そのお金を得る過程では絶えず熾烈な争いが発生していて、負ければ地獄に落ちるという感じの労働に巻き込まれていながら、かつて私たちはどんな労働をしながら生きていたのだろうかということがだんだん記憶から消えていった、私たちの記憶が消滅させられたという気がしてしまいます。

今問い直さなければいけないのは、もう一度私たちは無事な社会をどうつくっていくかということであり、無事な生き方というのは無事な人間の生き方でもありますけれども、無事な自然の生き方でもある。自然と人間が無事で、そして、社会が無事で、もちろん世界が無事でという無事な社会をつくっていくために私たちはどんな働き方をしなければいけないのか。市場で争っていく社会というのは、勝っているときには与えられたお金によって何となく平穏が保たれてはいますが、絶えず無事でないものが発生している。そこで、今のように経済が収縮を起こしますと、まさに無事でないところが破綻になってしまう。こういう在り方は根本から考え直していかないと私たちはいけないのではないかという気がしています。

そうしたときに、私は上野村の「仕事」と「稼ぎ」とか、ああいう世界にもう少し視野を戻しながら、われわれにとって無事な労働とは何だったのだろうか、絶えずそんなことを考えながら、もちろん現実には市場経済の社会ですから、この現実を全く無視もできないとしても、少しずつ軌道修正を図っていかねばならない時代に来ているような気がしております。

雑ぱくですが、こんな形で最初の問題提起を終わらせていただきます。どうも、長い時間、ありがとうございました。

第二部 パネルディスカッション

「百年無事に暮らせる仕事のあり方～自然・地域・人間の連鎖のなかで～」

コーディネーター 内山 節 氏（哲学者・立教大学大学院 教授）

パネリスト 大熊 孝 氏（新潟大学 名誉教授・河川工学者）

鬼頭 秀一 氏（東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授
・環境倫理学者）

西頭 徳三 氏（富山大学長）

浜田きよ子 氏（高齢生活研究所所長

排せつ用具の情報館「むつき」庵代表）

（内山） 私がまた司会をしながら、討論をしていきたいと思っております。先ほども話させてい

ただきましたが、私たちの仕事は、市場は見えているけれども、つまり、市場経済の市場は見えていないけれども、その代わりに見えなくなったものがあるような気がしています。何が見えなくなったかといいますと、生命が見えなくなったといいますか、あるいは生命の流れが見えなくなったという気がしています。

先ほどの上野村の「仕事」と「稼ぎ」の仕事ですが、あそこでは何が見えているかといいますと、村で暮らす人間たちの生命の結びつきが見えている。その生命の結びつきのところには自然というものもあって、自然が生命を育て、それを人間が仲介者のような仕事をして、それが、地域の人たちに届けられていく。さらに人間たちもまた生命と生命を結び合いながら助け合ったり、共同の仕事をしたりしながら自分たちの社会をつくっている。ここに見えているのは、生命系の世界の中で私たちは生きているという感じのような気がしています。

もともとの社会というのはそういう面があったと思うのですけれども、今日になってまいりますと、われわれはどんな生命の結びつきの中で生きているのだろうかということがだんだん見えなくなってきている。それに代わって、どんな市場との結びつきで生きているのかということだけが覚えてしまっている。その結果今日のように市場が劣化してきていると、どうしようもなく不安な時代を迎えざるを得なくなってしまうという感じがいたします。ですので、どうやらもう一度われわれは生命の結びつきの中で生きていけるのだということを回復できるのか、それが感じられるような働き方とか社会の在り方が見つけられるのかということこれから問うていかなければいけないような気がしています。

その点では、「日本海学」という問題の立て方は先駆的な立て方だったと私も思っております。なぜなら、日本海を一つの湖のような場所として見ながら、そこにどういう生命世界があったのかということをもう一度つかみ直していこうとされた。つまり、市場で結ばれているのではなく、この真ん中に日本海がある。もっとも、日本海という言葉を使うと甚だしく抗議してくる人たちも当然いて、私も分からないでもないといいますか、Sea of Japan ですから。Sea of Japan では我慢ならないという意見も分からないではないですけれども、海があって、その周りに展開した世界があって、その奥にはそれぞれの国の山がある。その全体の生命世界の中で私たちは何を考えていこうかという発想は、先駆的な問題提起だったような感じがいたします。

そういうことを少し念頭に置きながら、はじめに4人のパネリストの方々からご報告をいただきたいと思っております。では、よろしく願いいたします。

「川の矛盾 - 恵み・災い - と技術」

大熊 孝 氏（新潟大学名誉教授・河川工学者）

私からは今日の標題が「森・海・いのちの営み」ですが、その森と海をつないでいる川というところでお話を申し上げたいと存じます。

私に与えられたテーマは「川の矛盾 - 恵み・災い - と技術」ということで、先ほどから内山さんから技術の話がだいぶ出ているのですが、今までわれわれは技術というと効率を追求して、世界に共通する普遍的なものだという考え方が強かったと思うのです。私はやはり地域に特有で、その地域に住んでいる人々を豊かにし、楽しくするというものも技術ではないかなと考えておりまして、そういうお話をちょっとしたいと思っております。



図1は自己紹介ということですが、私は土木屋で、土木技術をやっております。台湾で生まれて、引き揚げてきたということです。こういう本を書いたよというだけです。後で見てください。

1・自己紹介

専門: 河川工学, 土木史
 1942年 台北生まれ、引き揚げ後、高松、千葉、新潟に住む。
 1967年 東京大学工学部土木工学科卒業
 1974年 東京大学大学院工学系研究科土木工学専攻・工学博士取得
 同年 新潟大学工学部助手
 1985年 新潟大学教授
 2008年 新潟大学定年退職、新潟大学名誉教授

2007・7・5発売 → 首都圏の水があふかない
 定価: 904円(税込)


 大橋 孝 著 出版社: 東京大学出版会 初版: 1981年2月20日 第4刷: 2001年8月30日 定価: 800円(税込)	 大橋 孝 著 出版社: 平凡社 初版: 1988年5月18日 文庫本: 2007年8月10日 定価: 1400円(税込)	 大橋 孝 著 出版社: ポプラ社 初版: 1995年4月 定価: 1600円(税込)	 大橋 孝 著 出版社: 奥山湯村文化協会 初版: 2004年2月28日 定価: 230円(税込)
---	---	---	---

図1

私は20年前ぐらいから「新潟の水辺を考える会」というのを作りまして、いろいろ活動してきました(図2)。最初のうちは考えてばかりいたのですけれども、考えていては話にならないねということで、汗をかこうということで、ごみ拾いとかが、いろいろな木を植えたり、そういうことをやってきました。2002年にもう

NPO法人 新潟水辺の会ドキュメント

- ’87年「新潟の水辺を考える会」スタート 柳川堀割物語上映
- ’89年、柳川水郷水都全国会議参加
 欧州近自然の川づくりを学ぶ
- ’90年、日本海1000kmカヌー横断航海支援
- ’91年、水郷水都全国会議開催
- ’94年「汗をかく会」に脱皮 通船川ネットワーク
- ’96年、ラムサール新潟シンポジウム
- ’98年、通船川・栗ノ木川下流再生市民会議
- ’00年、全国川の日WSグランプリ受賞 英蘭運河ツアー
- ’02年「責任をとる会」NPO法人・新潟水辺の会へ
- ’03年、信濃川舟運ツアーガイド支援
- ’04年、阿賀野川流域連携支援・全国一斉水質調査
- ’05年、ソウル市清溪川復元に学ぶシンポジウム
- ’06年、他門川再生研究/鮭の信濃川・千曲川復活へ流域連携活動

図2

ちょっと市民としても公共事業ができるのではないかとということで、責任を取る会になろうということでNPO法人になって、「新潟の水辺を考える会」から単純に「新潟水辺の会」になりました。私が一応代表をやっているということです。

こういう活動の中でもう一つ私がかかわったもので「阿賀に生きる」というドキュメンタリー映画を作りました(図3)。全国から3000万円集めて、1000万円借金してということで、お金を借りる都合上、私が制作委員会代表ということでこの映画を作りました。阿賀野川沿いの自然と共生していた人々の日常を描いたのですけれども、その



人たちがたまたまというか、必然的というか、新潟水俣病になってしまったのです。

このときに非常に驚いたのは、餅をついているのが加藤さんという人ですけれども、82歳です。これで20うすぐらい平気でついたのですね。それで、水俣病の患者なのです。あちこちの神経がおかしくなっているのですが、いざ、餅をつき始めると、これだけつけてしまうということです。自然と共生してきた人たちというのはそうやって肉体も鍛えられている一方で、自然とどう付き合ったらいいのかという精神もすごく豊かなものを持っているのですね。

ここで学んだことをちょっと書いてあります(図4)。本当に、皆さん、つつましく生きる力を持っていて、先ほども200年後とか300年後の時間の話が出ていましたけれども、皆さんは100年後、200年後の時間を考えて木を植えたり、農民というよりも百姓なのですね。川へ行って漁もするし、木も植えるし、畑もやる、田んぼもやるといった

ことで、自然の中で無事な暮らしというのを先ほども内山さんが話されておりましたけれども、それを末代までつなげていこうということをきちっと考えているということで、僕は内山さんが哲学者なら、ここの阿賀野川に住んでいたという人たちもみんな哲学者なのだと思ったのです。

「阿賀に生きる」から学んだこと

**自然との共生は、われわれに強靱な肉体と、
慎ましく生きる精神を授けてくれる。**

慎ましく生きる精神とは？

- 自分の命が循環する自然の中で生かされていることの認識。
他の生命をもらって生きている、うしろめたい存在であること。
根源的に自立できない、依存する存在であること。
- 循環する自然の時間を認識し、数百年に及ぶ長い時間を見通す力があること。

自然の中での「無事な暮らし」を子孫にまで継承させるには、
循環する自然の時間を熟知する必要がある。

図4

この映画はたくさん賞をもらいました(図5)。それで、1000万円借金していたのですが、それは賞金で返すことができました。監督は佐藤真という人で、初めての映画だったのですが、その後もたくさん映画を作りましたが、昨年亡くなっております。

「阿賀に生きる」の受賞

1. 第24回ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭(スイス)	銀賞ほか4賞
2. サンドانسフィルムフェスティバルイン東京 '93	グランプリ
3. アースビジョン '92	地球環境映像特別賞
4. 山形国際ドキュメンタリー映画祭 '93	優秀賞
5. '93 ベルフォール映画祭(フランス)	最優秀ドキュメンタリー賞
6. OCIC	日本カトリック映画賞
7. '92年度芸術選奨	文部大臣新人賞監督賞
8. '92年度文化庁	優秀映画作品賞
9. 日本映画撮影監督協会	第1回JSC賞
10. '92年度キネマ旬報	日本映画ベストテン第3位
11. '92年度日本映画ベンクラブベスト5	ノンフィアトリカル部門第1位

借金1000万円は賞金で返済!

**新潟日報文化賞を
貰えなかったのが
残念!**

推薦
日本映画ベンクラブ推薦
優秀映画鑑賞会推薦
青少年映画審議会推薦

監督・佐藤真さんは2007年9月逝去された。

図5

図6は、技術のお話ということで、私が技術をどう考えているかということです。技術の展開過程ということで、思想的段階、普遍的認識の段階、手段的段階ということを考えております。技術というのは考え方が変わると極端に変わっていくということですね。

最近の事例では 1990 年に当時の建設省が多自然型川づ

くりという提案をしました。それまで川の自然性なんていうのは全く考えないで技術を展開してありましたから、3面張りにして、ダムを造りさえすればいいという考え方でしたが、これからの川は自然環境を大切にしていかなければならないということです。

その思想が変わると、川のいろいろな生態系なんかが大事だということで、その研究が進んでくるし、手段的なところでも単にコンクリートでは駄目だねということで、昔から使われていた粗朶沈床とか水制とか、そういうものがまた復活してきている。だから、考え方が変わればすぐ変わってしまうのですね。こういう見方をすると分かりやすいねということです。

もう一つの分類は、技術というのは技術者が担っているだけではなくて、個人が担うところ、共同体で担うところ、それから、公共的段階で担うところ、それぞれがあるのですけれども(図7) 結局、今のわれわれは公共的段階で、みんな役所におんぶにだっこという形で、文句を言っていればいいやということになっていて、個人的なところや共

2・技術の考え方

土木技術の三段階 I (技術の展開過程における分類)
(Three Stages of Civil Engineering I)

【第一類】 ①思想的段階 Idea
 ②普遍的認識の段階 Scientific Cognition
 ③手段的段階 Means

信濃川の大河津分水
 構想 1730年代
 通水 1922年



明治時代中期に登場した西期的な3大手段
 ①大規模な浚渫・掘削を可能にした土工機械力
 ②コンクリートと鋼による一体的な堰・水門
 ③重力に反して大量に水を揚げるポンプ

図 6

土木技術の三段階 II (技術の担い手による分類)
(Three Stages of Civil Engineering II)

【第二類】 ①私的段階……小技術 Individual Action
 ②共同体的段階……中技術 Community Action
 ③公共的段階……大技術 Public Action



図 7

同体的なところがなくなってしまっている。先ほどの内山さんの話とちょっと通じるかなと思って
おります。こういうふうに技術を分けて考えると、いろいろなことが理解しやすくなるのかなと思
ってこれを使っております。

川の話ですけれども、富山
の川は、後でお話が出るので
しょうが、3000m駆け下って
1000mの海底まで落ちていく
ということで、すごく急なわ
けです(図8)。日本の川は大
体急なものですから洪水にな
りやすく、濁水になりやすい
ということです。これをいわ
れると確かにコンクリートで
固めなければならないと思
うのですけれども、短いとい

うことは、アユやサケが戻ってくるということをみんなよく知っているわけです。そういう見方で
川を見なければいけないのではないのか、と思います。

私は太平洋岸で育ったものですから、新潟に来るまではどうも弥生的感覚で川を見ていたのでは
ないのかなと思います。弥生的感覚というのはスサノオノミコトなのですね。スサノオノミコトが
斐伊川を治めたわけですね。ヤマタノオロチを退治したということになるわけです。弥生的感覚だ
と、確かにかんがい用水で水を頂いているのだけれども、洪水になったら困るね、濁水になったら
困るね、とどこかで川を敵視している。その表れがこのスサノオノミコトの話だと思うのです。

私が新潟に行って、アユとかサケがどんどん戻ってくる川を見て、これが縄文文化を支えたのだ
なと思ったときに、縄文的感覚で川というのは考えなければいけないのではないのかな、と考え始
めました。そのころから私は何となく、いわゆる土木屋ですけれども、ダムはできるだけやめた方
がいいとか、必要なダムというものはあるのですが、可能な限り造らない方がいいといったように考
えて、なかなかこれを言い出すのは難しかったのですが、「阿賀に生きる」という映画を作るところか
らだんだんと腹を据えて言おうというふうになりました。

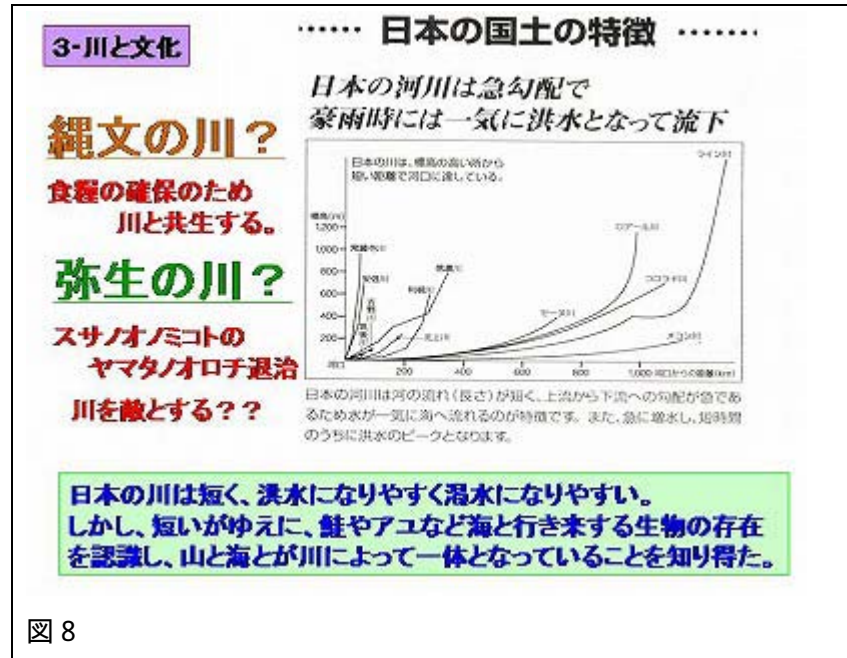
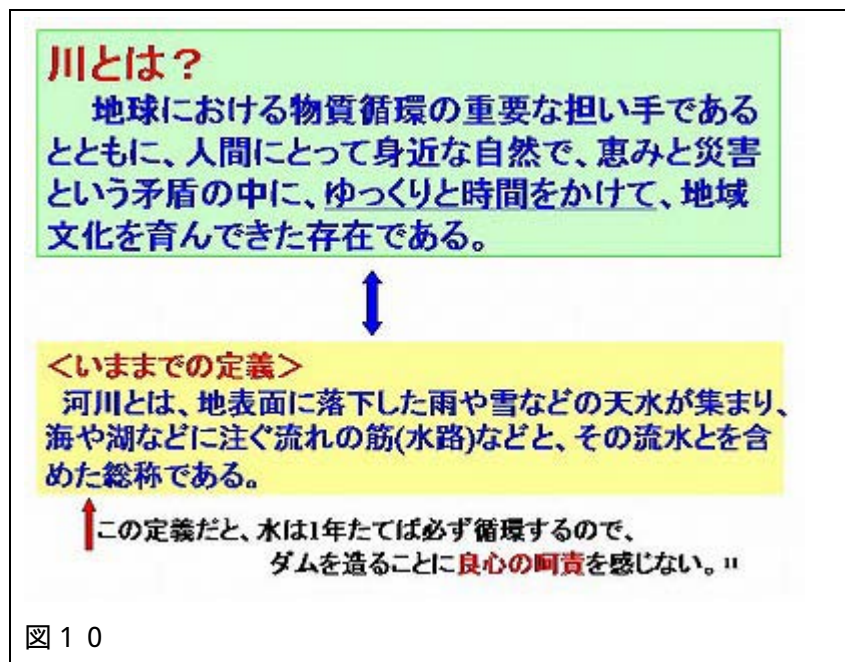


図9は水俣川の上流にある祠ですけれども、祠の中には必ずサンゴとかアワビが祭られています。「森は海の恋人」という言葉は15~16年前(もうちょっと前だったかな)に出てきた言葉ですけれども、昔からみんなこのことは知っていたのです。ということで、こういう祠が水俣川の上流には30ぐらいあります。水俣湾の海の豊かさは山からの落ち



葉が供給されて豊かになっているのだと、それに感謝しているということですね。あまりに豊かだったから、その魚を食べて、水俣病になってしまったということなのかもしれません。

私の川の定義は、「地球における物質循環の重要な担い手であるとともに、人間にとって身近な自然で、恵みと災害という矛盾の中に、ゆっくりと時間をかけて地域文化を育んできた存在である」というものです(図10)。この定義で、1990年ごろに「阿賀に生きる」という映画を作り始めた頃から学生たちを教育し始めました。それまでは



「河川とは、地表面に落下した雨や雪などの天水が集まり、海や湖などに注ぐ流れの筋(水路)などと、その流水とを含めた総称である」と教えていたということです。

私が好きな河川横断構造物というのはたくさんあるのですが、一番好きなのはこの築です(図11)。この築も腐って、20年ごとぐらいに作り替えていかなければならないのですが、

先ほどの法隆寺や何かはもうちょっと長いスパンなのかもしれませんが、これも20年ごとに造り替えていく中で、川とどう付き合ったらいいのかという技術が伝えられていくということです。

何よりこれは子どもを裸にできるという力があるのですね。

下の左の写真は、今から37年前の私の息子です。去年遊びに行ったときは女の子まで裸になっていますね。こうやって築に行くとみんな裸になるのですね。

子どもを裸にできるという構造物がほかにあるかなという、

これしかないのではないのかなと思っています。



図 1 1

ひとつ典型的なのが図 1 2 の長良川河口堰で、これは生態系にもいろいろな問題があるのですけれども、究極のところ素人を排除してしまっているのです。

こういう構造物ができると、専門家が川を全部牛耳ってしまうということで、そこに一番問題があるように思います。ただ、われわれは川に対して洪水は要らない、普段は水は欲しいという本当に矛盾したことを要求しているのです。その要求をうまく処理しようとするのでこういう技術が出てきているのです。こ

れも効率だけを考えたからこういうことになっているのですけれども、私はいろいろやりようがあると考えております。

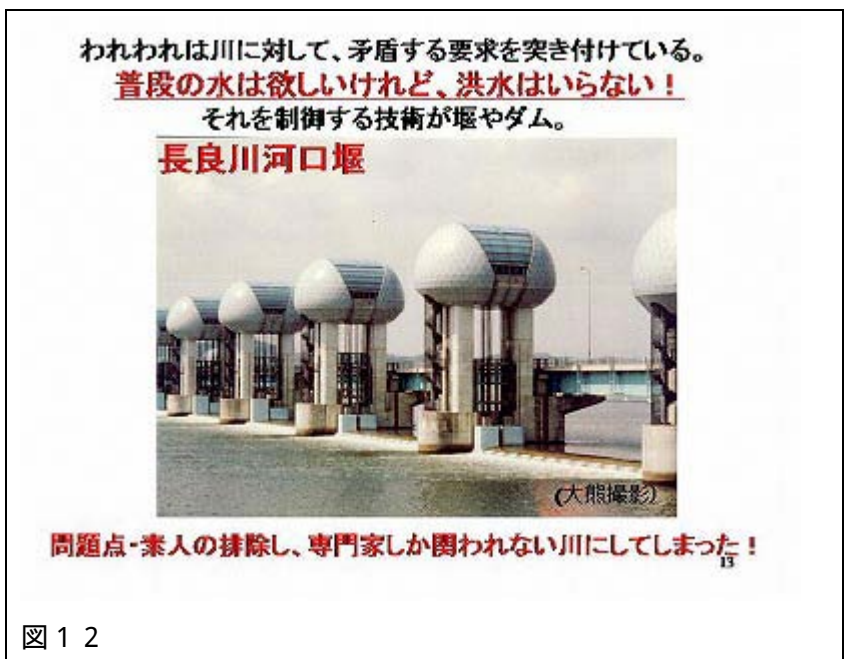


図 1 2

図 1 3 もそういう例の一つです。近くに小学校があり、小学生の子どもが可動堰のできる前には

川で遊んでいたのです。河川改修でついでにこういう可動堰にして、ボタン一つで仕事をすれば簡単だということで、こういう構造にしてしまったのですね。こういう構造になったら、子どもが落ちたら危ないから、子どもは絶対に近づいてはいけないとよということになってしましますね。

技術者は治水と利水しか考えなくて、子どもが遊んでいたということを考えなかったのですね。本当は子どもが優先的に遊んでいたのだから、子どもも遊

んでいるということを入れて技術展開したら、こういう構造ではなくて、また別なものになったはずなのです。そのことを大学出の土木技術者は忘れていたというか、われわれがきちんと教育してこなかったということがあるのだらうと思います。



図 1 3

ここの小学校はこういう校歌を持っていて(図14)、この校歌が素晴らしいと思ったのです。

「青田をうるおす川瀬の水も時にはあふれて里人たちのたわまぬ力を鍛えてくれる。われらも進んで仕事にあたる。心とからだを作ろう共に」ということで、川というのはあふれるものだと、いうことを前提としながら、心も体も自然と共生することによって両方が作られてくるのだということが歌われているわけですね。「こんな素晴らしい校歌で育ったあんたたちは、なぜあんな簡単にああいう堰を造らせてしまったのだ」と文句を言ったら一時期総スカンを食いましたが、だんだんと後で理解はしてくれました。

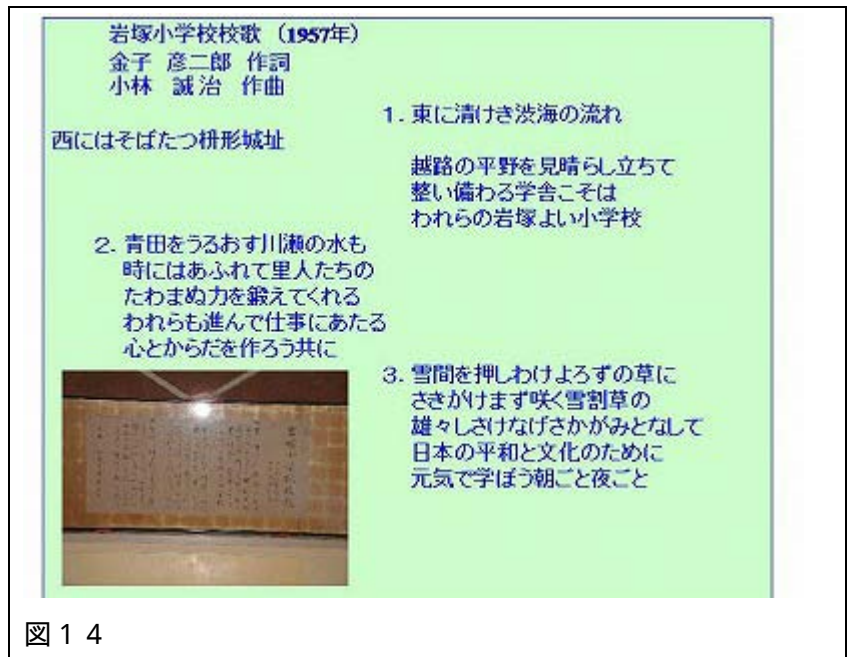


図 1 4

私は、図15の写真を「週間金曜日」で見たのですが、見たときにすごいなと思ったのです。先ほどの内山さんの話だと「仕事」をしているわけですね。仲間と一緒に楽しく仕事をしている。こんなことをやっていたら高度経済成長時代には間尺に合わないということで、これは可動堰にしてくれということになってしまったのでしょうか。今は私も定年して66歳ですけども、まだこれぐらいの作業ならできるかなと思っています。今は定年後20年間ぐらいはそれなりに時間があるわけです。そういう時間の使い方としてこれは本当にいいことだと思うのです。



図15

この写真を見たときに、この後またみんなは集会所か何かで一杯飲んで楽しい時間を持つのだなと思いました。今までわれわれ土木技術者がやってきたことは、みんなが共通で持てる楽しい時間を壊してきたということですね。ボタン一つで済むよということで壊してきてしまっている。やはりこういう仲間と楽しめる技術というのは大切に残していくべきなのではないかなと思っています。

最近、私が新潟でいろいろやっている活動の一つです(図16)。河川法が変わったということもあるのですが、市民の意見を聞いて、川の河川改修をやるということになってきました。こういうワークショップでいろいろな意見を聞いて、われわれはいろいろ提案しております。

特に顔の見える関係で話し合うということが大事なのです。インターネットで話したのでは



図16

駄目なのですね。顔を見ていると、あいつはわがまま言いすぎているとか、本当にあの人は困っているのだとかいうことが分かってきて、折り合い点を見つけられるのです。そういう意味では、こういうワークショップというのは非常に重要だと思います。

われわれがやっている場所は、図16右上に見える通船川という所で、その左は信濃川です。右が阿賀野川です。阿賀野川と信濃川を結んでいる川で、小さなどぶ川なのですが、そこである活動をしております。

ここはまだ家は建っていませんが、後でこの話をします。松崎ニュータウンというのがここにできました。それから、もう一つ、栗ノ木川というのが後で話に出てきますけれども、同じ図の中で通船川から下に伸びている川です。



図17

こんな絵を描いたりして、こういう階段護岸や船着き場が欲しいねということで提案してきました(図18)。



図18

今、申しあげました松崎ニュータウンというのが図19です。このニュータウンと、われわれの川をどうしようということの話が、縦割り行政の中で勝手に進んでいたのですけれども、区画整理の方も川沿いに5mの緑地帯を出して、川沿いに公園を配置してくれました。これは縦割り行政がお互いに顔を合わせているうちに「こうした方がいいね」ということでうまく展開した形ですね。



こういう階段護岸を造って、遊べる所を作りました(図20)。



子どもたちがこうやって非常に楽しく遊んでいるのですが（図2-1）実はこの浮き輪が問題になりました。ここの自治会は新しく転居してきた人ばかりで、はじめから階段護岸になっていたのです。危ないから柵を作ってくれという要望が地域住民から出てきました。それから、この浮き輪はこれでこうやって子どもが遊ぶから、危ないから撤去してくれということで



図 2 1

撤去されてしまいました。今のところ、できて数年になりますけれども、誰もおぼれていないのでいいと思っているのですが、こういうことがありました。

もう一つの栗ノ川の方はこういう鋼矢板護岸で（図2-2）これは落っこちたら絶対に上がれないのです。手を伸ばしても届かなくて上がれません。わきにこういう緑地帯があるのです。これは新潟地震の直後で、昭和40年代に造られたわけですが、緑地帯を造りながら、こういう直壁護岸で落ちたら上がれない。だから、間にフェンスを造るということです。技術



図 2 2

者の頭の中に緑地帯と川を一体に造るということが全然なかったということなのですね。だから、本当にあの当時の土木技術者は発想が貧弱だったのかなと思うのです。

こういう状況の中で、このわきに沼垂小学校というのがあるのですけれども、水辺に近づけるようにしてほしいというのが総合学習で出てきました。それを聞いた大人たちが、実情を知ってもら

おうということでさくら祭りというのをやって、1回目、2回目で3000人ぐらいずつ集めました。この船はわれわれの水辺の会が持っている船で、こういう船を出して子どもたちに乗ってもらうということをやりました。

乗ってもらうにも図23のようにガードレールをまたがないと乗れないということです。先ほどのようにワークショップで行政の人ともいろいろ顔をしょっちゅう合わせていましたから、こういうを見て、「それではあまりにかわいそうだ」と年度末の1月に、本年度は500万円ぐらい余りそうだとすることで、昔だったらその余った500万はどうなったか想像がつくと思うのですけれども、今は無理だということです。



図 2 3

30mの区間だけフェンスを取って、円形の階段護岸で水辺に近づけるようにしようということで1月に話が決まって、第3回目の4月23日までにこういう構造にしてくれました(図24)。これは市も照明をつけることで協力してくれたし、周りの人たちも植樹したり、子どもたちもいろいろ手伝ってくれて、こういう形にして、さくら祭りができました。こうやって総合



図 2 4

学習でやった子どもたちも挨拶をしてくれたということです。

このときに思ったのは、この子どもは多分自分の子どもにも、孫にも「このフェンスが取れたの

はおれたちが総合学習でやったのだよ」と伝えることになるだろうと思うのですね。だから、このことは100年間は少なくとも記憶としてつながれていくということで、大変これは良かったなと思っています。

フェンスが取れた区域は、今はこんな形で使われています(図25)。



図 2 5

ということで、記憶が非常に重要だよということが書いてありますので(図26)後で読んでおいてください。私の話はこれで終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

コミュニティに、物語りをつくり、それを継承して、「記憶」に残していくことが重要!

記憶が、個人の成長を促し、精神を形成する。「まちづくり」にとっても、重層的な時間蓄積のある、深みのある町が必要であり、歴史を記憶化する必要がある。

平野形成の記憶
 縄文の記憶
 湊町の記憶
 近代化の記憶

〈補足〉 客観的言葉 主体的言葉(個の体験にともなう能動的言葉?)

知識	≡	智恵
理解	≡	納得
歴史	≡	記憶 ↔ 風化(社会的) 忘却(個人的)

28

図 2 6

「自然・地域・人間をつなげる生物多様性の思想」

鬼頭 秀一 氏（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授・環境倫理学者）

鬼頭と申します。私は「自然・地域・人間をつなげる生物多様性の思想」ということでお話ししたいと思います。



まず最初に、私は環境倫理学というのをやっているのですが、環境倫理学というのは何なのかということなのです（図27）。一言で言えば、環境に対して私たちがどう振る舞うべきかということなのです。これはもちろん私たちが自然に対してどういうふうに振る舞うのかということなのです。いわば個人的に私たちはどうすべきかと皆さんはお考えになると思うのです

けれども、それだけではなくて、この社会自体をどういうふうに変えていくかということを考えないと、いくら個人でやっても限界があるし、あるいは今の熊さんのような技術的な問題、要するに、技術というのはどうあるべきかということが周りでは中心にあると思います。

ただ、それだけではなくて、自然に対して人と人がいろいろ協力し合ったり、いろいろな関係があります。ですから、人間と自然との関係だけではなくて、私たちが自然を前にして人と人がどういうふうにかかわり合うかということも大きな問題で、今日はそういうこともかなり中心になります。

自然・地域・人間をつなげる生物多様性の思想 日本海学シンポジウム「進-進-いのちの営みに学ぶ」

環境倫理 environmental ethics とは？

- ・ 「環境」に対してどのようにふるまうべきなのか？【規範】
- ・ (1)狭い意味での人間と自然との関係性のあり方
 - ・ 環境倫理は個人の問題だけではない
 - ・ 社会的・制度的問題
 - ・ 人間と自然との関係における社会的、制度的な問題
- ・ (2)自然を前にした人間と人間との関係性のあり方
 - ・ 環境にかかわるスタンスのさまざまな取り決め
 - ・ 社会的公正／社会正義の問題も含まれる

図 2 7

今日は 100 年のというお話もありますので、世界史的に今はどういう時代なのかということをお話していきたく思います。そもそも 17 世紀に近代科学が成立する、あるいは資本主義が出来上がるということで、基本的には人間がそういう力を持って、自然を支配して、収奪していく。まさに知は力なりとか、いろいろな知識をきちんと蓄積して、私たちが自然をある意味では管理できるというプログラムがその時代にできたと思いますね（図 2 8）。

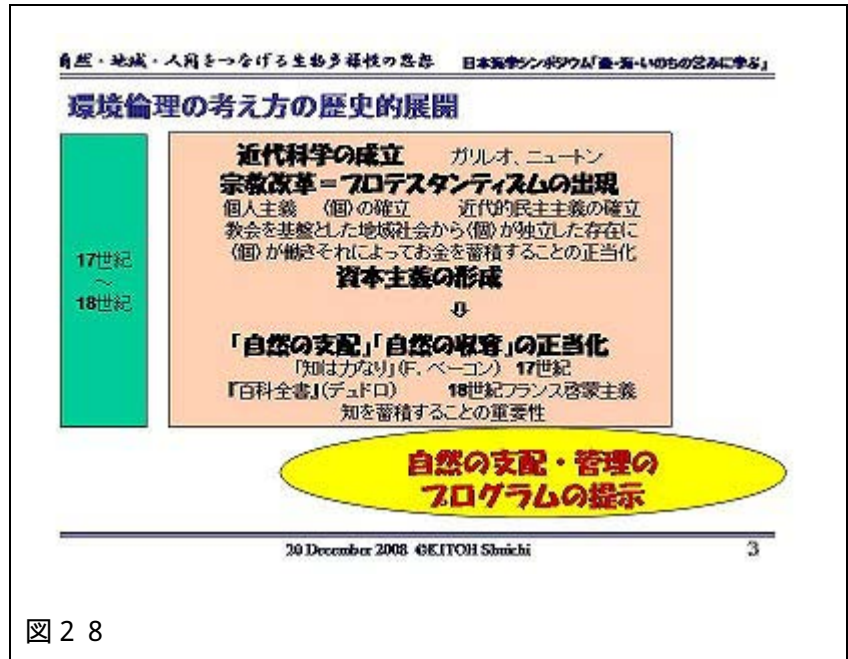


図 2 8

それが具体化したのが 19 世紀で、実際に産業革命があって、そういう形で自然の改変が本格化してきています。それにつれて、一方で破壊されていく自然に対して自然保護をしようという考え方も出てくる。こういう科学技術において支配、管理みたいなものを実際にやっというということになりますし、さらに第 1 次、第 2 次大戦を通じて科学技術を国家的に推進して

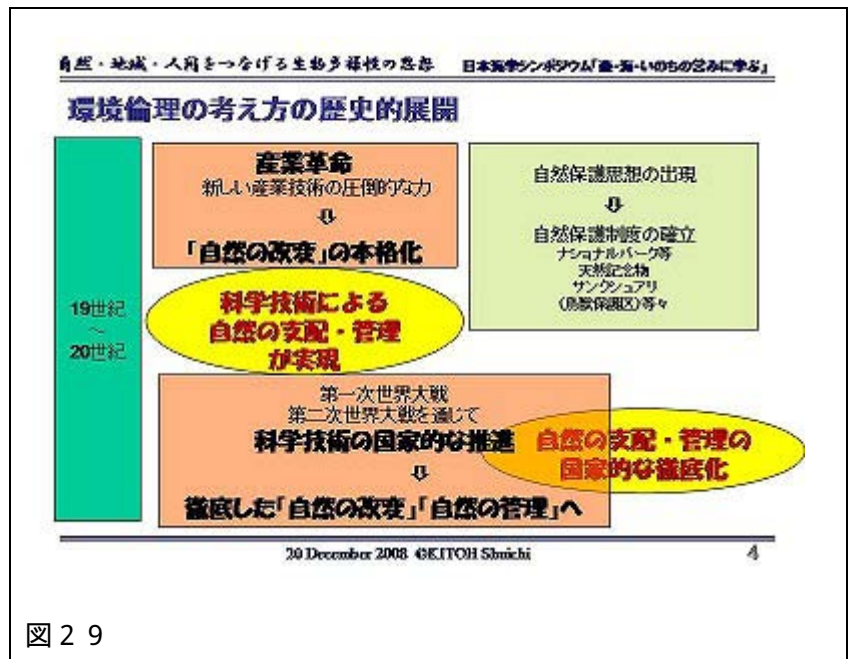


図 2 9

いくという中で徹底して自然の改変を進めていく、管理していくという時代になります（図 2 9）。

こういう国家的な管理の結果、ある意味では環境問題が出てくる。今まで人間がどうも人間中心でやりすぎたと、それを反省しようという形で人間中心主義に対する反省というのが出てくる。その中で人間以外の生物、生き物、生態系もきちんと考えるべきだと、人間は我慢すべきだという考

え方が一方で出てくる。一方で、この地球世界は有限性があるということで、まさに最初は資源問題という形になりましたけれども、現在では廃棄物問題とか、あるいは温暖化の問題なんていうのは、まさにCO₂が廃棄物というのと同じですから、そういう問題が出てくる。

大体これが1970年代です(図30)。国連でストックホルムの会議が開かれたり、石油ショックというのがまだ目新しい方もおられると思います。言ってみれば、今まで17世紀、18世紀からずっと進んできた人間の自然の支配・管理ということに限界があるということが分かったということだと思います。

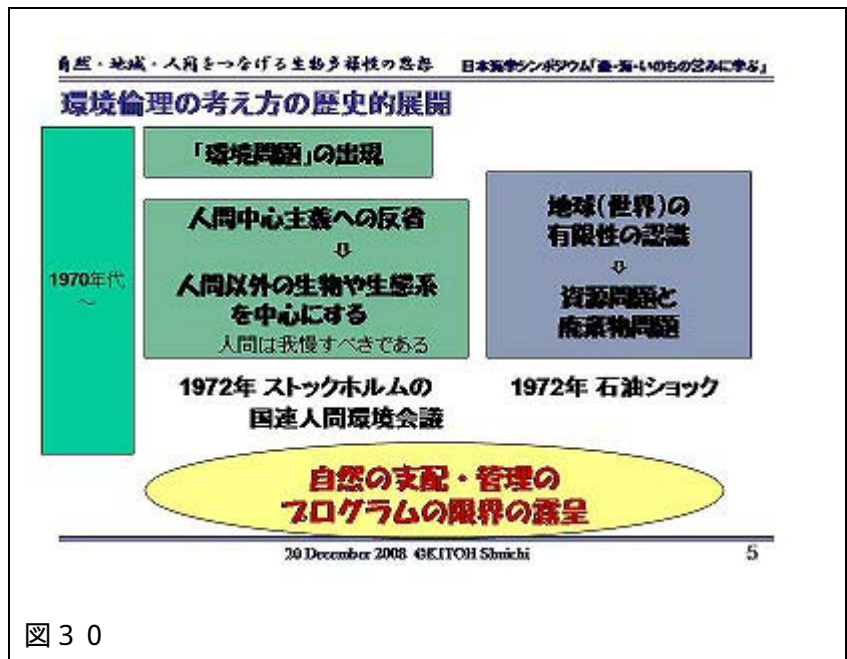


図 3 0

特に89年から90年代にかけて地球環境問題というものが盛んに論じられて、92年がリオのサミットです(図31)。環境問題がまさにグローバル化してくるという形で、皆さん、最近ほとんど温暖化バブルと言えるように温暖化の話ばかりですけれども、温暖化の話だけではなくて生物多様性の問題もあり、それぞれ国際条約が締結されるという形になってきました。こ

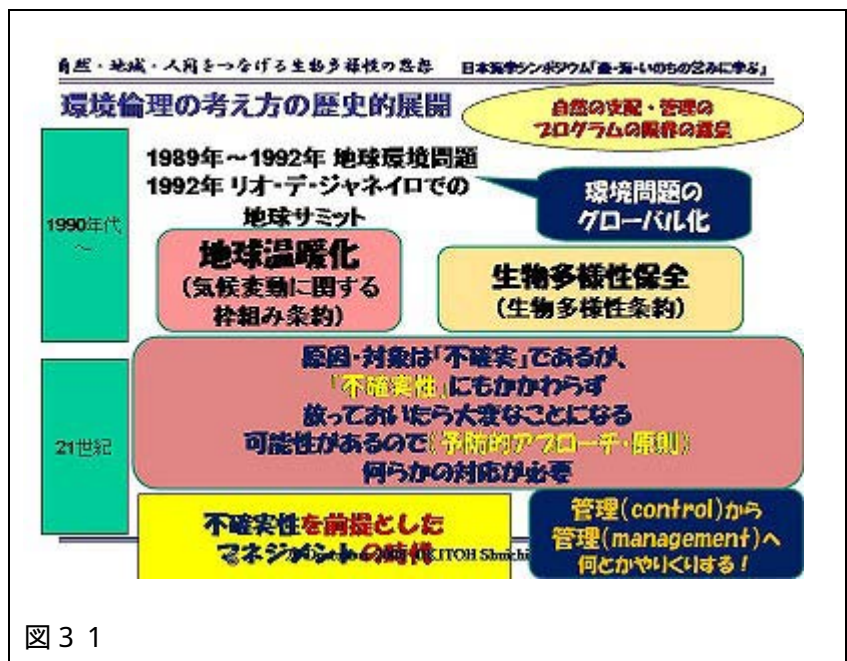


図 3 1

れに関してはいろいろな議論があって、温暖化も炭酸ガスだけではないのではないかと、いろいろな議論があります。原因はどうなのかという、非常に不確実であることは事実です。

でも、どうも今までのやり方は放っておいたら大変になるという形で、このまま放っておいたらどうしようもないから、予防的な形でわれわれが何とかしなければいけないというのが現在の時代

だと思うのです。つまり、こういう自然を支配し、管理していくということが、大熊さんの話にもあったようにずっと徹底化していったわけですが、それは根本的に限界がある、根源的に科学技術に関しても不確実性がある。

その中で私たちはどういうふう生きるかというのがこの21世紀に課せられた課題であって、不確実性を前提としてマネジメントする。今までは自然を管理するというのはコントロールしようとしてきたけれども、マネジメントだと。マネジメントというのはコントロールするのではなくて、何とかやりくりしていくという感じですが、そういうことがいわれる時代になってきたと思うのです。

その中で、先ほどは人間が中心になりすぎたから少し我慢しましょうという話で、自然とか、生態系を中心にして野生生物を保護したりということが行われますけれども、それがちょっと過度にされた場合に、自然に一番近い人たちが例えば山を利用したり、あるいは野生生物を狩猟して食べていたりする。そういうものさえも自然保護ということから圧迫されるということも起こりました。ですから、人間中心主義はどうなのだろうと。私たちが自然を利用してきたということはどういうふう考えたのだろうかということが今は非常に大きな課題になっています。

例えば手つかずの自然がいいというだけではなくて、二次的な自然といって、人間がかかわった自然をどう守っていくか。いわゆる里山の保全が課題になっていますし、あるいは人間の目から見ての景観ということも環境問題の中では非常に重要です。あるいは、いろいろな保全をやっていくにも住民参加がいわれてきて、言ってみれば人間中心主義をやめよう、自然とか生態系を中心にしようということではなくて、日本でいえば江戸時代までの生業とか遊び、あるいは大熊さんもいろいろな技術のところでああいう大きな構造物を建てるのではなくて、もっと違う形で川でかわってきた仕事は自然を利用するものなのだけれども、それは必ずしも人間中心主義ではないのではないか。もっと仕事ということを大事にとらえるということが大事ではないかということが現代的に非常に大きな問題になってきたと思います。

そこで、二つの留意点があると思うのです(図32)。一つは、先ほど言ったように私たちの自然に対する管理ということとはできない。例えば大熊さんの洪水の問題にしたって、洪水を全部押し止めるということとはできない。私たちはそういうことができないとなったときに、どうやってその中でやりくりしていくか。それはどちらかという今まで自然の中で何とかそこで生きざるを得ないような形でやってきた近代以前の人の暮らしをもう一度見直しながら、そういうものと現代のもう少しハイテク的なものをもっと組み合わせて、不確実性ということ为前提にマネジメントしなければいけないということになってきた。

もう一つは、人間が中心で駄目だというだけではなくて、人間が自然を利用したり、自然とかがわってきた在り方をもう一度見直しながら自然の中で豊かに生きる。あるいは、生業とか遊び仕事とか自然を利用するような仕事の在り方をどうしたらいいかということが大きな課題になってきたと思うのです。

自然・地域・人間をつなげる生物多様性の思考 日本海学シンポジウム「豊か-いのちの営みに学ぶ」

環境倫理の考え方の歴史的展開

二つの留意点

- (1) 17世紀からの人間の自然の支配のイデオロギーは、20世紀に完成を迎えて、その不可能性が明らかに**不完全性を前提に、不確実な情報の中でマネジメントするという新しいパラダイムが生まれた**
- (2) 「人間中心主義の克服」という呪縛を脱しなければならないということが明らかになった。
自然を前にした人間の社会的関係や精神的な問題に新たに**社会的公正/社会正義の問題(環境正義)の問題**
自然との関係性の中で豊かに生きるという精神性の問題
生業や遊び仕事で自然を「利用」するような「仕事」のあり方に注目が集まってきた。

20 December 2008 KEITOH Shimichi 8

図 3 2

ですから、不確実性というか、持続性ということで、とにかくいろいろな環境対策ということは我慢することだという感じですが、我慢するとなると、往々にして一部の人に我慢が偏るのです。どちらかというと自然に非常に近い人たちに我慢が偏ってしまう。一番自然に遠くて、都会の人が環境問題、環境問題とやっているのだけれども、ちょっともそこら辺が改善しない。

自然・地域・人間をつなげる生物多様性の思考 日本海学シンポジウム「豊か-いのちの営みに学ぶ」

環境倫理を考える三つの要素

<p>環境持続性 限られた資源への対応 環境負荷を下げる 生態系の再生力を高める</p>	→	<p>自然的環境</p>	<p>ガマンすること？</p>
<p>社会的公正 環境問題や環境対策によって、より多く不利益を受ける人の存在を認識し対応する</p>	→	<p>社会的環境</p>	<p>【ガマン】が特定のの人たちに偏ることはおかしい！</p>
<p>存在の豊かさ 結果的に持続可能性や社会的公正を実現するよう「豊かさ」人間以外の生物などと共存することも「豊かさ」の一つ</p>	→	<p>精神的環境</p>	<p>生き生き生きることによってこそ【環境】は守られる</p>

20 December 2008 KEITOH Shimichi 9

図 3 3

そうではなくて、もう少し私たちがどうやって豊かに生きるかということを根本的に考える。生き生きすることによってもう少し環境を守ろうという形で、先ほどの大熊さんのいろいろな川の文化を新たに作っていくということもそうだと思うのですが、そういうことになってきたのではないかと。そういう意味で、自然的な環境、社会的な環境、精神的環境の三つの環境というのを同時に考えていくという視点が必要です。往々にして自然的な環境だけが環境問題と注目されるという問題があると思います(図33)。

そもそも環境というのは主体を囲むものというのが環境ですから、ある意味では自然的な環境もあるでしょう。精神的な環境、歴史的な環境、文化的な環境もあるでしょう。それから、社会的な環境もあるでしょう。その三つをもう一度私たちは考えなければいけない。もちろん自然ということを見ると、自然の中にもいろいろな形の自然があります。ですから、そうい

うようないろいろな自然の在り方みたいなのを考えなければいけないけれども、精神的な環境、社会的な環境を含めて、トータルに考えていくということが今は求められていると思うのですね（図34）。

さて、富山でやるので、砺波の散居村なのですが（図35）まさにこれは5月ごろに水田に水が入った所で、点々と集落が見える。一つの集落の家の周りを杉とかいろいろな木を植えて、これが防風林になったりします。

自然・地域・人間をつなげる生物多様性の視点 日本海学シンポジウム「豊-富-いのちの営みに学ぶ」

「環境」environment とは？

- 主体にとっての「環境」——さまざまな位相
 - 自然的環境
 - 「自然」をどう捉えるか
 - 原生自然、二次的自然
 - 「生態系」概念、「生物多様性」
 - 客体としての「自然」、人間と自然との関係性
 - 精神的環境 歴史的環境、文化的環境
 - 社会的環境
- 「自然的環境」「精神的環境」「社会的環境」をトータルとして捉えることの重要性

図 3 4

自然・地域・人間をつなげる生物多様性の視点 日本海学シンポジウム「豊-富-いのちの営みに学ぶ」

砺波の散(居)村



20 December 2008 ©EITOH Shichi 11

図 3 5

それだけではなく、これは昔の地図なのですが(図36)、大体水路がみんな通っています。今はかなり基盤整備をして昔ながらのものはそんなに残っていないのですが、昔は水路が家の中に入り込んでいて、そこで水を使ったり、いろいろなものを洗ったりしていたわけですね。

そういうものの中で、言ってみれば水辺の暮らしの中に人間と自然の共生みたいな形でこういう景観がある。ですから、砺波の散居村というのは非常に外から見たらきれいだということ

です。今は田園空間博物館とか、そういう形で保全されていますけれども、その中には人々の暮らし、水とのかかわりというのがあるわけです。



図36

それから、五箇山とか白川郷の合掌造りがあります(図37)。これは30年とか、40年ごとに茅を替えていかなければいけない。こういう茅を葺き替えるという作業がどうしても必要です。それとともにこの茅を刈る作業が必要で、茅刈りというところが行われるわけです。

ですから、五箇山、白川郷というと、文化遺産だということですが、文化遺産を維持

するためには茅場が必要であって、茅場の自然が必要です。ですから、ある意味では茅場の自然をきちんと守っていくということを考えると、五箇山、白川郷は文化遺産だけではなくて、複合遺産として考えた方がいいのではないかと、思います。



図37

逆にいうと、白神とか、知床とか、屋久島は自然遺産だと言っていますけれども、言ってみればそこで暮らしている人々の文化がある。そういうことを考えると、あれは自然遺産というだけではなくて、もっと人間の文化ということを考えなければいけない。ですから、今言いましたように自然的な環境だけではなくて、いろいろなところで人々の関係がある。そこで生き

生きとみんながそういうものを伝えていくというものがあって初めて成立している。それをトータルに考えるということが必要なわけです（図38）。

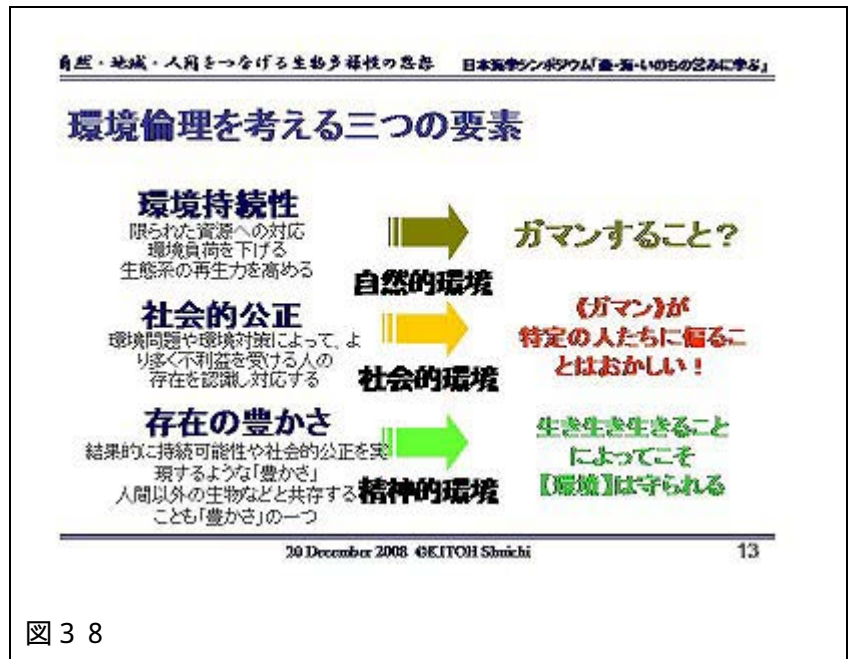


図38

そのときに一つキーワードとして、私は先ほども出てきた「遊び仕事」というのをちょっと見てみたいのですね。これはもともと経済的には意味は少ないのだけれども、みんな一生懸命やっている。なくなっても経済的には大したことはないのだけれども、どうしてもこれがないといけませんというものをマイナー・サブシステンスというようです。これは文化人類学、民俗学の言葉

なので、それを私は「遊び仕事」と呼んでいるのです（図39）。

この「遊び仕事」の「仕事」というのは今日の基調講演の内山さんにあったまさに「仕事」ということです。「広義の仕事」ということを考えると、ただ稼ぐだけではなくて、もっと多様な仕事がある。その仕事の中で非常に精神性が強いもの、遊びの要素があるようなものが「遊び仕事」です。

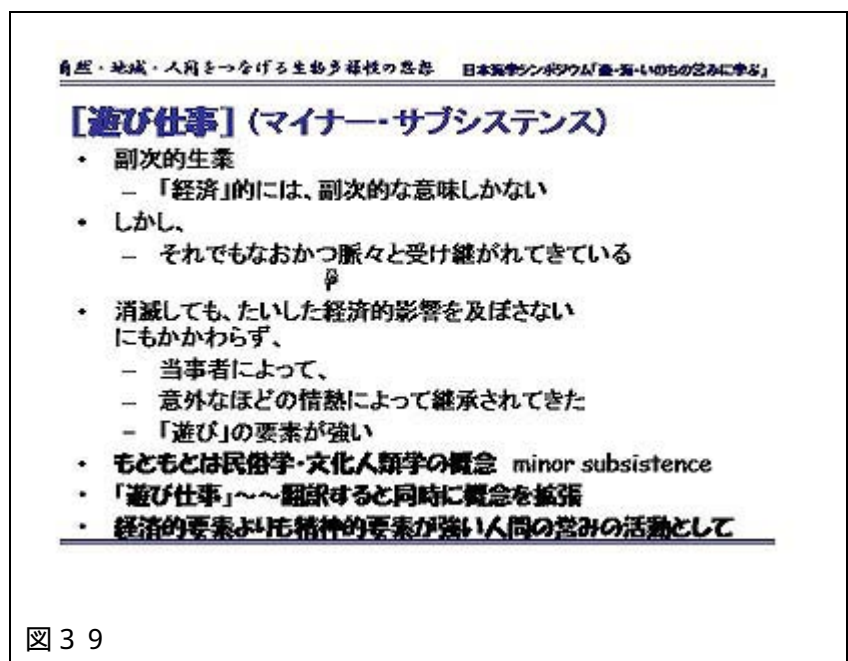


図39

経済性よりも精神性が強いようなものをちょっと考えてみたい、ということです。

例えば山菜採りとか、キノコ採りというのが一般的ですね。今は市場に売ってしまう人がいますけれども、ああいうのはちょっとおかしいです。たくさん採ってきたのは近所に配るといのが昔はそうだった。ですから、好きな人は好きでよく行くのですけれども、好きで行かなくても、フキノトウの季節だとなると自然に隣からフキノトウが来たりして季節の味が楽し

めるというものが「遊び仕事」なのですね(図40)。

川でアユを取ったり、サケを取ったり、あるいは昔はため池とか水田で水鳥を取ったりしました。この辺だと加賀の方で加賀の鴨池というのがあって、あそこでは坂網猟といってまだ伝統猟があって、ラムサール条約の湿地ですけれども、そこから飛んでくるカモを坂網で取ってやるという猟が残っていますが、そういうのが「遊び仕事」ですね。例えば水田でコイを取ったり、長野の方だとハチ子を取って、どこまでもハチを追いかけていくとか、そういうものもあります。

内山さんが言われたように、山の仕事は非常に複合的な仕事であって、まさに「遊び仕事」的なもので、現代的に言えば、多分里山のボランティアとか森林ボランティアもそうでしょう。あるいは農業でも定年退職者が農業をやっている。これは普通の農業活動ではないです。経済的なことを考えなくても、趣味というか、自分のやりたいやり方でやる。要するに、経済性というか、市場経済的なものよりも非常に精神的なもの、あるいは生命とのつながりみたいなものを大事にするということが「遊び仕事」です。だから、経済的にはカウントされないけれども、非常に精神性が高い、自然と深くかかわるようなものを「遊び仕事」といいます。

この「遊び仕事」というのは大事ではないかということが今日の話ですけれども、よく考えますと、もともとの農業とかそういうものは確かに非常に経済性が高いのです。子どもの遊びになると、経済性はあまりない。でも、全くないわけではないのです。要するに、子どもが昔遊んでツクシをつんできたら、夕食にツクシが出る。そうすると、まさに子どもがつんできたツクシを食べるわけ

自然・地域・人間をつなげる生物多様性の恩恵 日本海学シンポジウム「遊-遊びの心で学ぶ」

【遊び仕事】の例

- ・ 農耕民の行なう、(もともとは...)
- 狩猟活動(例:水田やため池での水鳥猟)
- 漁撈活動(例:サケやアユなどの伝統漁)
- 採集活動(例:山菜取り、キノコ取り)
- ・ 他に、水田養魚(鯉)、蜂子とり、畦での雑穀栽培等
- ・ 山の仕事などの複合生業的な営み
- ・ 里山の管理活動、森林ボランティアなども
- ・ 定年退職者(年金生活者)の農業も含まれる
- ・ 経済的にはカウントされないより広範な精神的意味の高い、自然と深くかかわる活動一般

図 4 0

です。エビを食べたりする、ウナギを食べたりするわけです。ある意味では、立派にあの子どもは経済活動をしているということにもなるわけです。でも、低いだろう。

逆に精神的なものといえば、子どもの遊びは非常に精神的なもので、普通の農業はそうでもないということなのだけれども、実はしっかりそういうものもある。その中間的なものが「遊び仕事」で、人間の労働とか仕事とかいうのは、そういう非常に経済性の高いものから子どもの遊びまで連続的な中に私たちの仕事とか暮らしがあるのではないかといいたいと思います。



図 4 1

人間と自然との関係を図にしましたが(図 4 2) 横軸は、割と物に関するものから心に関するものです。縦軸は自然と人間との関係から、自然を前にした人間と人間との関係までを表しています。例えば人間と自然との関係で、物というのは捕って食うということです。それから、物に関係すると、貨幣とかいう形で経済的な関係がある。でも、精神的なものもあるでしょう。

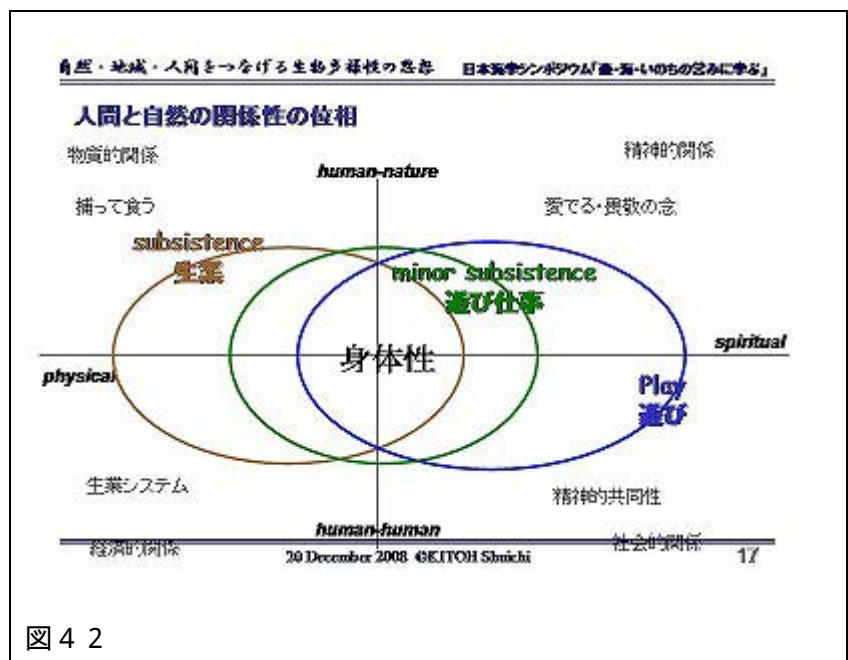


図 4 2

社会的な関係もあるし、例えば自然に対する畏敬の念みたいなものがある。そうすると、これは内山さんの言う先ほど言った「広義の仕事」です。広義の労働はまさに捕って食うところから、経済システムだけではなくて、自然に対するいろいろな精神的なものもある。

一方で遊びというのも先ほど言ったように非常に精神的なものから社会的な関係もある。でも、捕って食ったりとか、多少経済的なものもあった。「遊び仕事」というのはこの真ん中なのです。

ところが、これが産業社会の中で図4-3のような形になってしまった。これが内山さんの言う「狭義の労働」ということで、まさに精神性がなくなった労働という形で実際に自然を使う。実際に経済活動をしているけれども、ほとんど精神性がないような形です。だから、高度成長以降、こういう形になってしまったのです。子どもの遊びはどうなったかという、子どもの

遊びは自然との関係を失って、ゲームをやったり、ほとんど家庭に閉じこもるようになってしまった。まさにこれは現在の仕事と遊びの分業化です。それによって「遊び仕事」がなくなってしまったというのが現状です。

そこで、「遊び仕事」をもう一度考えたいと思います(図4-4)。例えば定年退職者が一生懸命農業をやるというのもそういうことです。里山でいろいろな活動をする。川べりでいろいろな活動をするというのもまさに「遊び仕事」です。そこで竹炭を作ったり、まきストーブをやるというのでまきを切ったり、いろいろなことをやります。そういうことが今は求められている

し、そういうものの中で私たちの仕事を見直さなければいけないと思います。

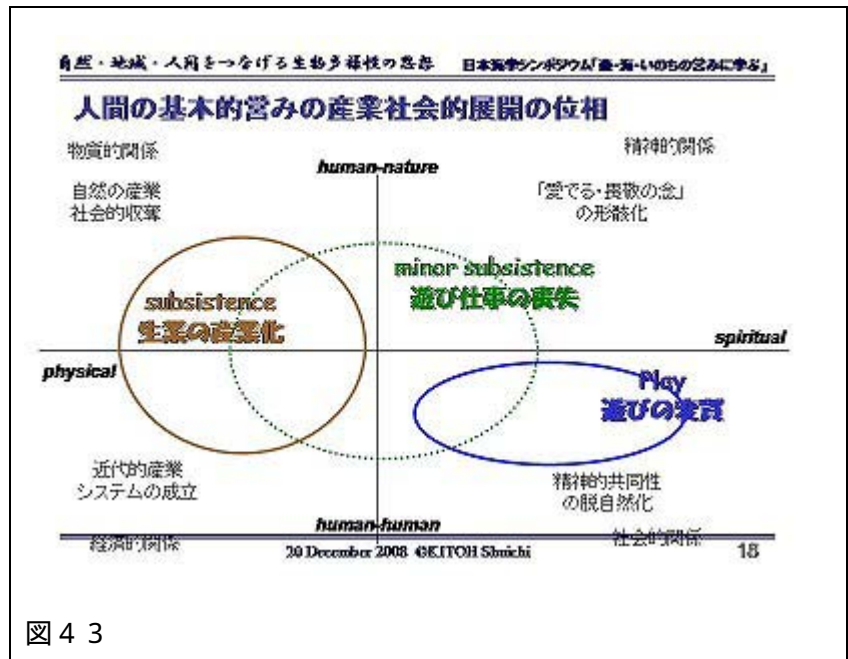


図4-3

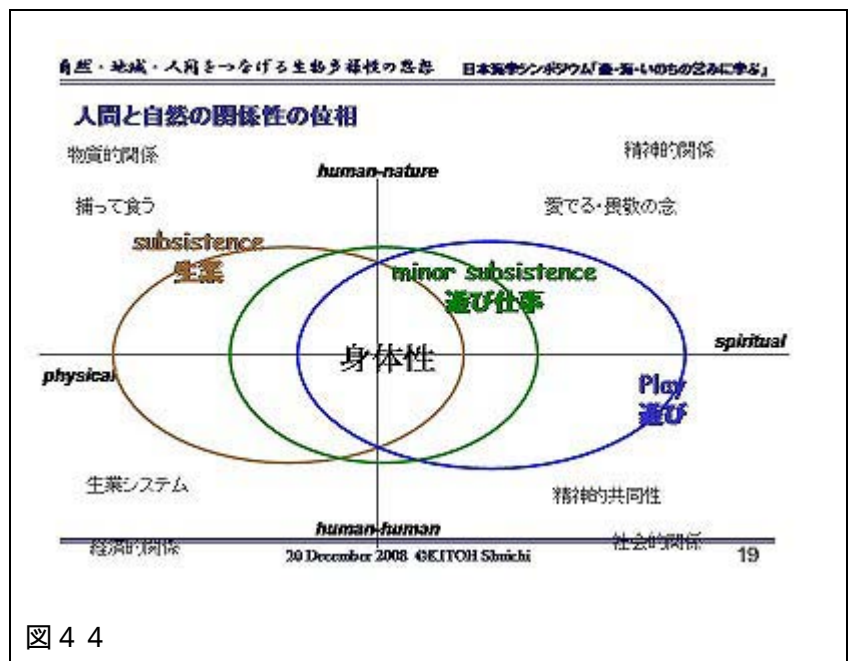
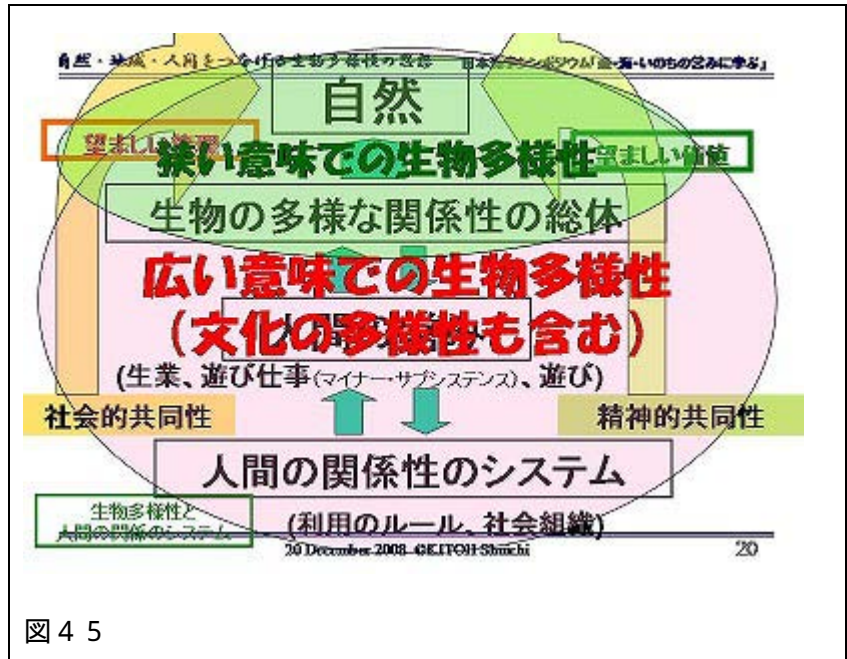


図4-4

生物多様性ということを考えますと、普通は自然のいろいろな生き物がいて、まさに生物多様性ということがいわれます。でも、今申し上げたように、いろいろな生き物と人との営みというのはいろいろな関係があります。農業とか林業とか、そういう業とも関係しているし、あるいは「遊び仕事」とか遊びという形でも関係している。さらに、ただ関係しているだけでは



なくて、いろいろなルールを決めたり、マツタケが採れるときになると急にマツタケの組合ができて、きちんと管理するとか、そういうことが行われていた。

生物多様性ということをよくいわれるのですけれども、ただ自然のものだけではなくて、こういう形で人間がかかわっているものすべてを考えなければいけないし、さらにいえば、そういうときにみんなが協力し合って共同的な形で何かを管理していく。あるいは、みんなが自然がどうも荒れてしまったと感じたときに、きれいにしようとか、そこで何かきちんと守らなければいけないという形でいろいろな暮らしがあるという形で、こういう社会的な共同性、精神的な共同性で生物多様性は育まれているわけです。

先ほども申し上げたように、92年に生物多様性条約がリオの地球サミットのときに採択されて、日本でもこれをきちんと締結して、生物多様性国家戦略というのを95年あたりから作りました。昨年(2007年)の11月に第3次ができています。その間に自然再生とか、いろいろなことが行われています。さらに言えば、

- 生物多様性保全への国際的・国内的取り組み
- 1992年 地球サミット(リオ・デ・ジャネイロ) 生物多様性条約採択
 - 1993年 生物多様性条約発効・日本/締結
 - 1995年10月 生物多様性国家戦略策定
 - 2002年3月 新・生物多様性国家戦略(閣議決定)
 - 2002年度から 自然再生事業の開始、展開
 - 釧路湿原(北海道)、くもぎ山(埼玉県)等々
 - 2003年1月 自然再生推進法の制定、施行
 - 自然再生協議会を設置して多様な主体がかかわり、合意形成する新しい方式
 - 2006年～ 自然再生推進法の行政評価(総務省)
 - 2007年11月27日 第三次生物多様性国家戦略(閣議決定) 100年計画、「SATOYAMAイニシアティブ」
 - 2008年5月24日～26日 G8 環境大臣会合(神戸)
 - 2008年7月7日～9日 北海道洞爺湖サミット
 - 2010年 生物多様性条約 第十回締結国会議(COPI10)が名古屋で開催される予定
- 図 4 6

今年の洞爺湖サミットでも多少そういう議論がありましたし、2010年、再来年には名古屋で生物多様性の締結国会議が開かれて、生物多様性保全をどうするかという国際的な議論が日本でも行われるということなのです(図46)。

そういう中で生物多様性ということを考えたときに、生態系サービスということがいわれています(図47)。どういうことかということ、生態系とか、生物多様性というのを評価するのに、今までみたいに自然を守れというだけではなくて、生態系サービスという形で自然を守ろうことを考えた方がいいのではないかという考えを国連のミレニアム生態系評価というところから始めました。

まずは供給という形で、自然というのはいろいろなものを供給してくれる。魚を食べたりすることもそうです。農業でいろいろな食糧になるようなものもあるでしょう。家を建てるにもいろいろな生態系が必要です。先ほどの茅葺きの屋根を造るためには必要だとかいうのもある。それだけではなくて、すべての基盤になるようなところに生態系はあります。こういうことが今までいわれてきたのですけれども、それだけではなくて、生態系には自然をいろいろ調整してくる機能がある。

ですから、洪水というのは今までは大熊先生の話にあったようにずっと押し込めてきたけれども、そうではなくて、森の力とか河畔林とか、いろいろな自然の生態系の力でこういう洪水とかを緩和することもできるのです。そういうことがだんだん知られるようになって、生態系の中で調整サービスというのが大事だといわれるようになってきました。

それだけではなくて、もう一つ文化的なサービスがいられています。もともとこれは生態学とか自然科学の人とか、どちらかというと経済学の人が行っているのですけれども、文化的なサービスという形で非常に精神的なもので生物多様性を守ることが大事だということがだんだん分かってきました。

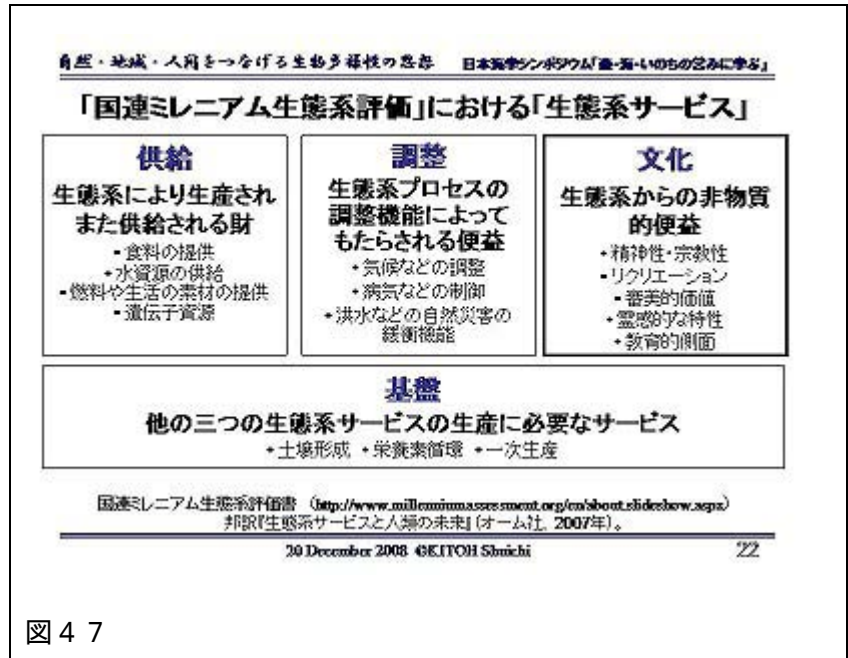


図 4 7

昨年の第3次生物多様性国家戦略のパンフレットの表紙です。これは昔の農業とは全然違ってしまって、人がまさに茅葺きの屋根でいろいろな草を管理したりしている。あるいは茅を管理したりするようなことです。こういうものが表紙になるぐらいに生物多様性を守ることが変わってきているわけです。

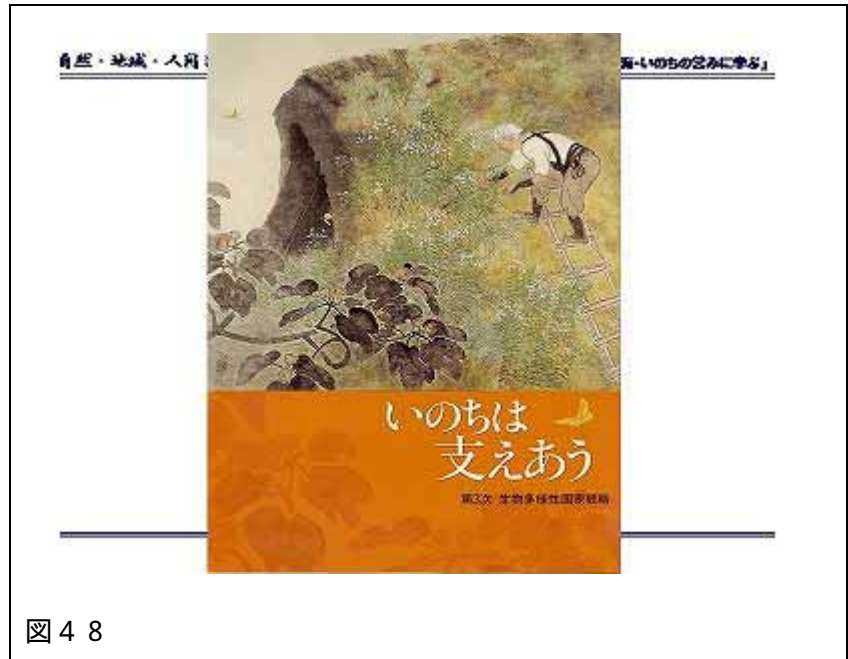


図 4 8

また、いろいろな形で自然に戻そうという試みが行われています。この近くだったら、例えばトキを戻そうということを佐渡でやっています。

兵庫県の豊岡は日本海側ですが、こちらでコウノトリの野生復帰事業が行われています。昔はコウノトリがいました。それがだんだんいろいろな基盤整備とか農薬を使うようになって、ほとんど生息できなくなって絶滅しました。もう一度これを再生しようということです。どうやって再生するかというと、コウノトリにしても、トキにしても、餌場がないと駄目ですか

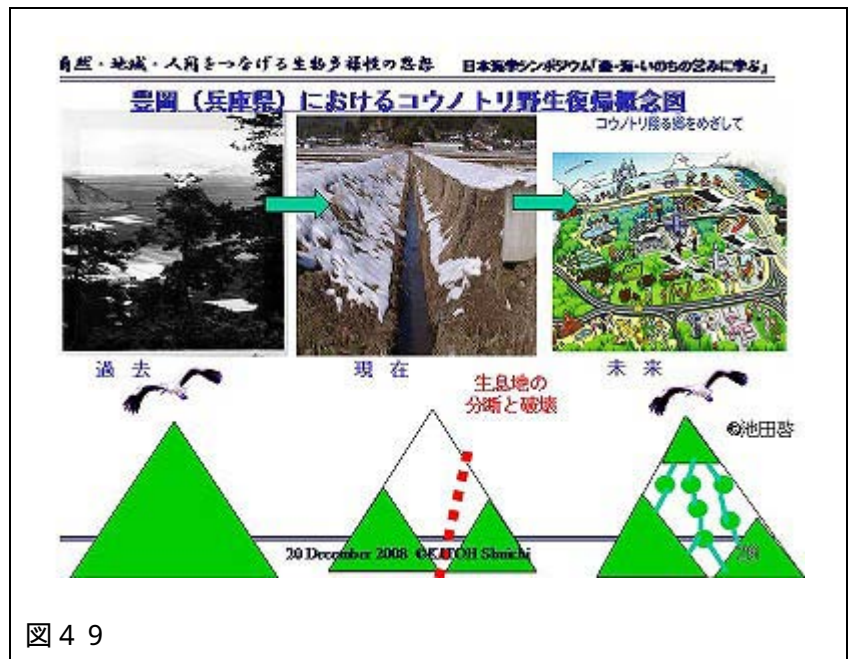


図 4 9

ら、きちんと餌を確保するためには、ちゃんと動物がいるような水田をもちろん確保しようとする形でやられているわけですね。

仕事の在り方を、ただ生産力を高めるといってどんどん農薬を使って動物がいなくなりました。トキもなくなりました。コウノトリもなくなりました。それから、非

常に便利にしようということで、どんどんどんどん河川整備をやることによってコウノトリやトキが住めなくなった。それをもう一度住めるような形で農業のやり方をちょっと変えようとか、いろいろな水路とか、そういうものの管理を変えようという形で行われています。

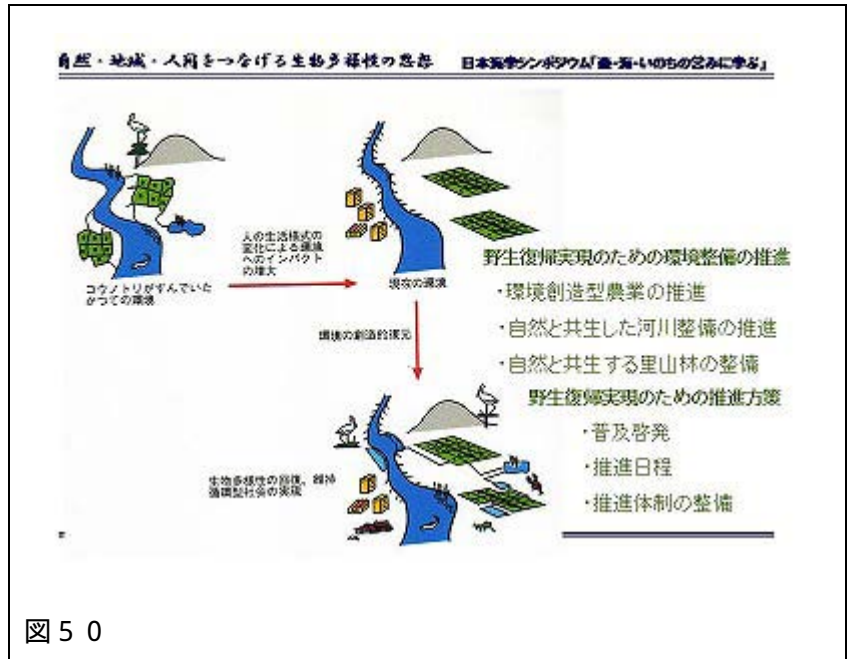


図 5 0

かつては豊岡では 1960 年に牛を洗いに川に行くと、こうやってコウノトリがいました。人間が行ってもほとんど逃げない。そんな状態でした。それが放鳥して、再び放鳥したコウノトリが来ているし、あるいは野生のコウノトリが来て住み着いているという形です(図 5 1)。こういう野生復帰とか自然を守れとかいうことも私たちの暮らしとどういうふうに関係するかとい



図 5 1

うところで今は展開しているということで、今日のお話を終わりたいと思います。

「高度差 4000mの空間・富山に見る生命の循環」

西頭 徳三 氏 (富山大学長)

今日これからお話しするのは何か素晴らしい一つの方法を提示するというよりも、こういう考え方もできませんかということをおは申し上げたいと思います。従って、今日は富山の方が中心ですので、私が申し上げることについて、「それは、西頭、違うんじゃないの」とか、「それはもうちょっとこういうふうに考えたらどうかな」ということがあったら、遠慮なく教えていただきたいということをおは申し上げたいと思います。



これは別に今日のテーマとは関係なしに私がずっと考えていたことを皆さんにお話ししますが、ほかの先生方の話を聞いていますと話がだいぶ重なっております。そういう時期にあるのかなと思いつながら話を聞いていました。

今日与えられたパンフレットの中にこういうテーマが書いてございます。「高度差 4000mの空間・富山に見る生命の循環」ということ。「高度差 4000」というのは、富山大学がだいぶ熱心にあちこちでシンポジウムをやっていますので新聞等に随分載っておりますし、ケーブルテレビでも放送していますので耳にしていらっしゃる方が多いと思います。では、これから内容についてお話をいたします。

先ほども出ていますが、一つは環境問題です。今日の天気は大変いい。私は富山の生まれですが、冬にこんな天気のいいというのはあまりない。恐らく今日、東京から、あるいは新潟からお見えになった方を歓迎しているのだらうと思います。東の立山連峰が大変きれいに見えます。富山大学の私のいる部屋からも、3階ですので、非常によく見えます。その辺からお話をしたいと思います。

環境問題で温暖化とか、いろいろいわれています。こういうものをどう考えていくかというのが一つございます。それから、もう一点、私は5年前に40年ぶりに富山に帰ってまいりましたが、富山で一番感じたのは、私は南砺市、福光なのですが、私が高校時代にいた町のにぎわいは全くありませんでした。今もありません。

一番驚いたのは、高岡短期大学に参ったときに、11月ということもあったので、あの駅前寂しさです。ホテルニューオータニに泊まったのですが、何十年ぶりに帰ってきたし、食事をしようかと思って探したら食堂がないのです。これはどうなったのだと思ひ、しょうがないから酒を飲むところに入って飯を食わせてくれと言って、食事をとりましたが、大変街自体が落ち込んでいます。

先ほども出ていましたが、経済のグローバル化ということもございます。今度また不況が来るといわれています。そういう中でこの富山というところをどうしたらいいのだらう。企業は自由に中国に行ったり、あるいはインドに行ったりすることができます。しかし、この富山という県土はどこにも持っていきません。ここに111万人の富山県民が住んでいるわけです。今の世の中の流れの

中で海外にも出られない富山の土地をどうするかということです。これは私だけの問題ではなくて、皆さん自身も非常にご心配になっているところだと思います。

中でも少子高齢化です。子どもの姿がほとんど見られません。例えば富山大学近くの安野屋小学校は廃校になって統合されました。星井小学校もなくなりました。あそこの生徒が6年後には大学に入ってくる。だから、「少子高齢化、大変だね」なんて言っているうちに、富山大学の志願者減となって影響するのです。本当の話、今、大学は大変ですからね。そういう問題があるわけです。ですから、地域の活性化をいかにやるかという大きなテーマがございます。これが2点目です。

もう一点ございます。皆さん、ご存じのように、平成17年の10月1日に旧富山大学、旧富山医科薬科大学、高岡短期大学の三つの大学が統合されて、新しい富山大学になりました。なんと先生方が1000人います。職員が1000人、教職員が2000人です。そして、学生が1万人です。私がここで一番言いたいのは、全部で10部局あり、医学部から工学、人文学部とかの先生方の持っている研究力とか教育力を地域の活性化に生かせないかということです。これが3点目です。

もう一度繰り返しますと、環境問題が非常に顕在化するというか、まさに具体的な問題として出ている。2番目は地域経済の活性化です。富山県は外国には移せません。三つ目は新しい富山大学の先生方、学生という人的資源を富山のために生かせないか。

話が移りますが、私は愛媛大学におりました時に、高岡短期大学長の蛸山昌一先生がお亡くなりになり、統合も控えており、人を探していたのでしょね。「来ないか」という話があり、私は愛媛大学の定年の年でしたので、「富山に帰ろうか」ということになりました。

その時は、愛媛大学の先生方や職員が送別会を開いてくれたのです。ところが、司会者は高岡がどこにあるか分からないのです。ある人は高山と勘違いしているのです。長岡と間違えている人もいます。「山形の向こうじゃないか。」と言っている人もいますのです。皆さん、お笑いになっていらっしゃるんですが、皆さんは福島県の場所をはっきり言えますか。佐賀県がどこにあるのか、地理の先生は分かるかと思いますが、そういう状況です。

金沢は比較的知られています。なぜ知られているかということ、金沢は旧制四高があって、室生犀星は四高ではないのですが、井上靖がいたり、鈴木大拙がいたりで金沢は文学作品に書かれている。だから、知られているのです。富山はその点、残念ながらよく知られていない。

それから、私が富山大学の学長になってから大学のパンフレットを見ましたら、そのパンフレットには富山大学の理念と目標が書かれている。それは、どこの大学であっても通用する、いわゆる金太郎飴なのですね。富山大学のものを金沢のそれと置き換えても十分通用するし、新潟大学や信州大学でもいいというものを書いてある。富山県にある大学が富山の特色をなぜ書かないのか。最近、ようやくそのような動きが出てきています。国立大学は全国で87ぐらいありますが、読んでみると大体そのようになっています。東大とか京大はよく知られていますからそれでもいいのですが、

地方の大学はそれでは駄目だということです。ですから、富山の特色を表すものに変えたいと思っていました。

つまり、富山の特色をまるごと表現するスローガンが欲しいということです。もちろん、薬の富山、屋気楼、ブリ、ホタルイカ、などありますがこれでは弱い。富山が分からない。薬は富山ばかりではありませんからね。そうすると、富山の役割、機能というものをまるごと表現する、これこそ富山だという言葉が必要と私は考えたのです。

話が私ごとになって恐縮ですが、私は高岡短期大学に平成15年の11月1日に赴任いたしました。私は福光の生まれですので、冬の景色は曇天ばかりです。ところが、ある日、大学への途中、立山連峰が見えたのです。「すごい山だ」と、本日の立山連峰のようでした。皆さんは、立山連峰を見るために呉羽山に登ったりするでしょうが、私のお勧めの場所は現在の芸術文化学部の辺りです。その理由を言います。

ずっと遠方に立山連峰が見える。立山連峰は昔から存在していたけれど、今日はなぜこんなにきれいに見えるのかと、しばらく考えました。立山連峰の高さは3000mです。ところが、私はこれまで立山連峰だけを見ていたのです。この時はそうではなかったのです。立山連峰の前には、広い富山平野がある。高岡からだど射水平野がある。南に行くと砺波平野があって、北には海があり、富山湾がある。この広がりと高さをイメージしてください。つまり広がりの中に高さがある。いわゆる立方体としての空間がある。私は40年ぶりに帰ってきて、昔は立山連峰だけを見ていたのだけれど、その時は平面と組み合わせて見た。平面の発見というか、これが、私にとって大発見でした。

その後、富山大学に来ましたが、これをきっかけにいろいろ考え、「これは高度差4000ということではないか」と。誰もが知っています。立山連峰の高さ3000mと富山湾の1000mの深さを足すと4000mになります。この立山連峰と広大な平面との4000mの高度差の中に何があるのか。そこには水の循環があります。もう少し分かりやすく言うと、海や平野から蒸発した水蒸気が立山連峰にぶつかって雨になり川となる。それが富山平野を流れ下って海に出ます。もちろん、一部は地下水として海底に湧き出ます。この空間に巨大な大気循環があるのです。

この循環の話をあちこちでしているうちに、このようなものは世界に三つしかないと聞きました。一つはアンデス山脈によく似たものがあるそうです。イタリアにもそういう場所があるそうです。しかし、その辺には産業もなければ、文化もあまりない、いわゆる自然の地形らしいのです。ところが、富山の場合には海があり、平野があって、産業があって、市街地もある。さらに言えば、水は高い山から下りて、里山を通り、富山平野を経て、海にそそぐ。山村があり、農村があり、漁村があるという大きな水循環です。

この話を、名前を出して恐縮ですが、医学部長の鏡森先生に話したら、「それは生命循環だよ、命の循環だ」。つまり、富山の特色は高度差4000の中に世界でもまれな水循環というメカニズムがあ

るということです。しかも、これは太古の昔からあって、われわれ富山県民の先祖は自分たちの生活を支え、今日の富山の歴史や文化をつくってきたということです。

ですから、「高度差 4000」と言うと、愛媛県の人でも「それは富山のことだよ」と分かるように打ち出したいと思い、5月に富山大学のパンフレットの冒頭にこの言葉を書き込みました。理学部の張先生は地球環境問題の権威の方ですが、先生は、「富山の人はこの特色を見逃して、もったいないことをしている」と。中国の人に「もったいない」と言われました。こんなに素晴らしい自然の特色をなぜ大切になぜしないのか、ということです。

張先生が監修されたNHKの「神秘の海 富山湾」という番組をご覧になったことありますか。あの作品は、新湊漁協の矢野組合長がこの間亡くなられて残念なのですが、新湊の海で獲れる魚は庄川の上流からいろいろな栄養分が流れ込むことによって育つのだと言われたことがヒントになっています。「森の木1本ブリ1000本」なんて言葉もありますが、富山湾は単独に存在しているのではなくて、山とつながっているのです。

そういうことで、この富山の水の大循環、命の循環は地球環境の縮図モデルだともいわれています。これは環境問題研究の適地なのです。環境問題の計測は世界のいろいろなポイントで行われているのですが、これらのデータを集めて環境問題を解明しているのです。この富山の水循環の中で計測すればデータの地理的な修正をしないで、全体的な環境問題の解明ができる。そういう意味で地球環境縮図モデルだということです。これを聞いて、私たちはこの言葉を生かせるのではないかという自信を持ちました。

問題は、これからどうするかということです。先ほどから大熊先生、鬼頭先生の言葉にもありましたが、このような生態系の中からいろいろなヒントやサービスを引き出したい。その前に、高度差 4000 のメカニズムをまず県民の皆さんに知ってもらおう。その点では富山大学にはいろいろな研究分野がありますから、先生を総動員してそのメカニズムを解明してもらおう。これは基本的な課題です。

次に、このメカニズムを活用して、海外に移すことのできない富山の経済、産業、文化を活性化させる。これには工学部、経済学部など、いろいろな学部の知恵を絞って、そういう活性化方法を模索し、教育学部では、教育のあり方を考えていくという地域貢献もあります。

そういうことで、私達はこの「高度差 4000」という言葉を、もちろん葉の富山も含んでいますが、命の循環の概念を 21 世紀のかなり先まで見通した未来志向的なものと位置づけたい。そういうことで、今日はこういう概念を提示して、富山大学が人づくりとか、産業の活性化とか、例えばお土産や観光開発など、すべての面で貢献することを理解していただきたい。日本中に、あるいは世界中に富山を知っていただくというのが大きな目標ですが、同時に研究面でも深めていきたいと思っています。

そういう意味で、冒頭に申し上げましたように、ぜひ富山にいらっしゃる皆さまからいろいろなコメントや助言をいただければ、ますますブラッシュアップになると思っておりますので、よろしくをお願いします。これで終わります。

「老いに寄りそう仕事」

浜田 きよ子 氏（高齢生活研究所所長、排せつ用具の情報館「むつき」庵代表）

京都で介護にかかわる仕事をしております浜田きよ子と申します。介護の仕事と申しますと、「この不況の中ですごくいいでしょう」といわれますが、私自身は介護がそういったビジネスになること自体本当にそれでいいのだろうか、介護というのは地域密着でローカルなものなのに、それが日本全国チェーンのような介護というシステムがあること自体が本当にいいのだろうか。そんなことを思いながら仕事をしています。



私自身は西陣という京都の本当に古い地域で仕事をしているのです。これは私の仕事場周辺の写真ですが（図52）、町屋という本当に間口が狭くて、奥行きがとてもあるウナギの寝床といわれる場所です。



図 5 2

西陣は機屋さんというか、織屋さん、機があるところがとてもたくさんあって、今でこそどんどん機屋さんがつぶれていきますけれども、まだ何軒か残っています。家の入口、土間で、そして、通り土間があって、広がって行って、奥がトイレ、そんな家なのです(図53)。この前に出ているのは糸を繰る道具ですが、もう仕事がないのか、運動靴を干すようなものになっていて、ちょっと寂しい西陣ですが、こんな地域です。



図53

これは割と近くの市場です(図54)。まだまだ西陣はこういった市場があちこちに残っています。いわゆるスーパーマーケットではなくて、このような市場では長く付き合っている方々が多いので、「あそこのおばあさんが来たら、あれが好きだから、今日はこの魚がおいしくて」と勧めてくれたりしながら買い物をするのです。不自由になった方にはお店の方も魚を切り身に



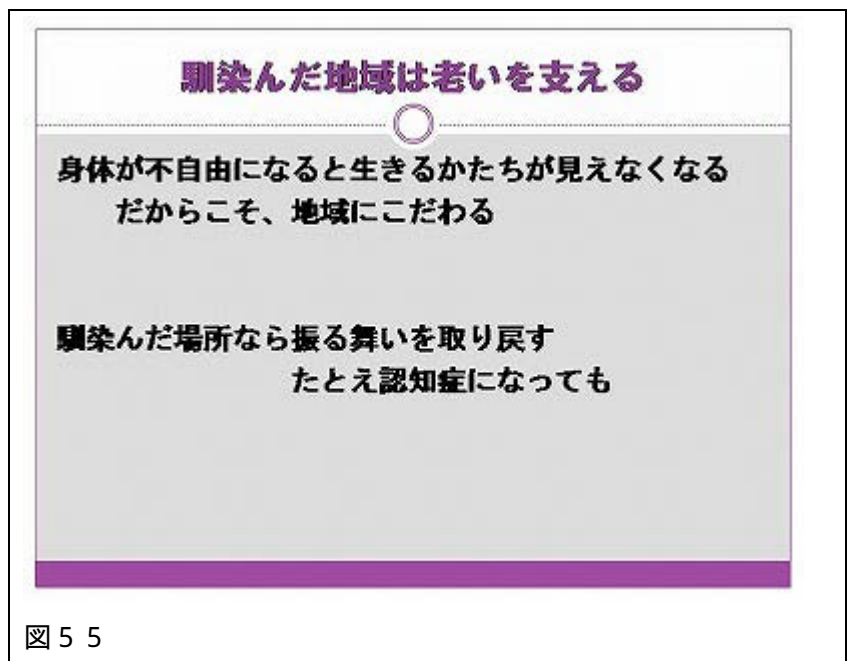
図54

して、ちゃんと仕事が終わってから夕方に届けてくれたり、そんなこともまだまだ残っています。

その意味で本当に人が老いて、地域で暮らす、それはやはり買い物も含めて、以前からの関係の中で人が生活しているのだ。そんなことをあらためて思うのです。そう思うと、人が暮らしているのはまさにその地域の中で他者とともに、そして、先ほどからお話のあったように、自分な

りの役割とか、生きる形を持ちながら暮らしている。

ところが、介護が必要になるくらい体が不自由になると、いわば生きる形が見えなくなってくるわけです(図55)。元気なうちは当たり前起居すること、それから、人から求められること、そんな生きる形が見えても、例えば脳梗塞で右半身まひとかになると、生きる形が見えなくなってくる。そのときに介護保険で、介護サービスという形で全く知らない方々が自分の家に来て、用具を持ってきたり、介護をしてくれたりする。排せつ介護でおむつを交換する。入浴介



助でお風呂に入れてくれる。しかしそんな場面の介護をつないでも、本当に人の生きる形がそこで見えてくるのだろうか。そんなことにこだわりながら西陣の端っこの方でいろいろな試みをしています。

私は、本当に馴染んだ地域というのは老いを支えると思っていて、体が不自由になると、今言いましたように生きる形が見えなくなってくる。そのときに、例えば先ほどの市場で長くお互いが知っていたら、必要な食べ物を時にはちゃんと調理して持ってきてくれたり、隣近所の方が来てくれたりします。でも、現実はそのこと自体が難しくなっているぐらい、家庭も、そして地域も崩れているのが現状ですから、今のままでちゃんと地域で生きていけるかということ、確かに難しいことはあると思います。

しかし本当に馴染んだ場所は、まさにその方の振る舞いを取り戻すというか、人はその地域の中で自分の振る舞い方を思い出したり、取り戻したりできます。これは認知症の方などとお付き合いしていてあらためて思うことです。自分自身を考えてもそうなのですが、全然知らない新しい施設に行くと、いきなりここでどんなふうに自分が振る舞ったらいいのか。この相手の方に私はどんな言葉をかけたらいいのか。そんなふうなさまざまな判断が難しくなる中で新しい所に適応していくのは一層難しい中で、自分がよくよく知っている場所だからこそ自分の振る舞い方が分かる。それが大きな地域の意味だと思っています。だからこそ、介護というのは本当にローカルで、まさに地域密着のものはずなのに、介護がそうでなくなっていること自体にあれこれ問題があると思っています。

これは私の仕事場で(図56)「排泄用具の情報館」を運営しております。ここでは売られているおむつの8割くらいのものをそろえていて、それから、ポータブルトイレとか尿器とか、いろいろな用具をたくさんそろえています。用具だけでも400点を超えるものがあります。

排泄用具の情報館「むつき庵」



図56

それから、2階には老いを支えるちょっとした便利な用具、これは後から幾つかお見せしますけれども、こういったものをそろえています(図57)。そして、西陣だけではなく、あちこちから相談にいらっしゃるので、紙のおむつ類などはどれでも試せるといった形で無料で相談を受ける場所を運営しています。

老いを支える用具



図57

例えば、図58の上の方にあるちょっと変わった帽子などは雪道で転んでも頭をぶつけないような工夫があるような、あれば便利な用具なのです。



図58

老いを支える道具のことを少し詳しくお話をしますと、これらは本人が主体となってというか、自分であれこれ上手に使いながら生活ができるものです。不自由になった部分を支えてくれる用具がいろいろあるのですが、まだまだあまり知られていません(図59)。

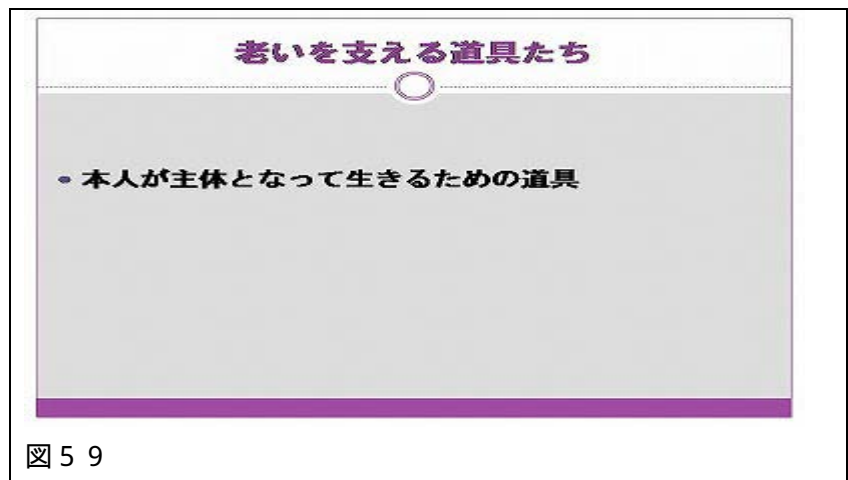


図59

うちのスタッフには84歳で要介護2になりました女性がありますが、彼女は両足、両膝が人工関節で、座ることに制限があります。お風呂に入っても立つのが大変ですが、たかだか湯船の縁にちょっとした滑らないようなマットを置いておくだけで(図60)、彼女はとても立つのが楽だと言ってくれるのです。湯船の底に滑り止め



図60

シートを敷いてあるのですけれども、おかげでちゃんと立つときには足を突っ張れますから便利です。彼女はこれがあることで人の介助を受けずにちゃんとお風呂から出入りができるからすごく便利と言ってくれます。

耳がちょっと遠くなって、人の話が聞こえなくなったときに、ともすると補聴器などを考えるのですが、あれは人によってはなかなかうまく使えなかったりします。何もかも大きく聞こえるというのは良かったり、悪かったりで、耳が煩わしかったりします。聞こえ方の変化になかなか馴染めなくて、煩わしいと言って取ってしまう方も少なくないのです。この助聴器（図6



図 6 1

1) は自分が聞きたい声だけちょうど携帯電話のように耳の横に当てれば、あるいは見たい番組だけ、都合のいいときだけ耳のそばに置いておいたら、声が大きく聞こえる便利な道具です。

指先が不自由になったら、箸がうまく使えません。施設などに行くとフォークとかでうどんを食べたりしていますが、やはり食具というのは、うどんなら箸で食べるからおいしい。その意味では道具は本当に選ばないといけないと思います。箸などはさまざまな便利なものがあります（図6 2）。



図 6 2

食事用のエプロンも、よくあるのは向かって左の(図63)の大きなエプロンで、保育所の子どもが使うようなものを平気で高齢者の方に使っていたりするのですが、右側のはベストのようなおしゃれなエプロンです。少し食べこぼしなんかがあるときでも、左側のエプロンだったら恥ずかしくて使いたくないと思う人も少なくないのですが、



図63

右側のベストのようなものだったら、安心のために使っておいてもいいなと思っていただけます。

その意味では本当に老いを支えるいろいろな用具もあるので、私の仕事場、高齢生活研究所ではこういった用具なども紹介したりしています。

ここは今日の話とあまり関係ないのですが、用具については、自分で選べばいいと思われるかもしれませんが、しかし福祉用具はきちんと選ばないといけません。例えば高齢者施設に行くと、非常に崩れた姿勢で車いすに座っている方をよく見かけます。これはその方が悪いのではなく、その方に車いすが合っていないために姿勢が崩れてしまうのです。ですからその方の身体機能に応じた車いすを選べば、姿勢は格段によくなります。その結果、身体が楽になり、飲み込みやすさも違ってくるため、食事がしやすくなります。それだけではなく、排泄も楽にできるようになります。このように車いすなどの福祉用具は使う人の好みなどではなく、その人の状態に合ったものを選ぶことが重要なのです。

用具のことを話してきましたが、地域の中で人がいつまでも暮らすために私自身は仕事をしています。そのためにもこの少子高齢化の中で、地域自体が、隣近所がかつてのように本当にお互いに知り合っているといった関係ではなくなる中では、もう一度いわばお互いをつなぎ合うようなための出会いと、それから、やはり用具を選んだりするための介護のことをちょっと学んだりしてもらうことも必要です。

そんな意味ではいろいろな勉強会をしています(図64)。



図64

そして、こんなふうには排せつなことなども実際にあれこれ若い方も一緒になって、若い方にも覚えてもらって、学生さんたちが来たりもしています(図65)。



図65

私の仕事場では高齢者の方のさまざまな全国各地からお作りになったものを集めて、値段を付けていただいて、販売まですることをしてしています。なぜそんなことをしているかというと、たまたまいろいろな方からもらったものを友人が「欲しい、欲しい」と言ってくれて、無理やり取られていくような感じであげたのです。そうしたら、彼女がお金を「ご本人に気持ちだけ」とかと言ってく

れたので、失礼かなと思いながら、「あれがどうしても欲しいと言う方があって、お金を置いていきました」ということを言ったら、そのお金を渡したおばあさんが、「自分のものをお金を払ってまで欲しいと言ってくれる人がいるのだ」とすごく喜んでくださいました。高齢者が作るものというのは手仕事の文化が本当にそこに反映されているので、そして地域性もあります。

その方の手に渡るような形で、そんなものをたくさん集めて、時には展示即売会などもしています（図66）。



図66

これは寝屋川のHさんのお雛様で、ハマグリの中に雛様が入っているものです（図67）。Hさんは3回脳梗塞で倒れて、Hさんの作品が欲しいといういろいろな方の声があったので、彼女はその声を息子さんから聞いて、一生懸命また元気になって、リハビリをさせていただきます。もう一回このお雛様を作りたいという思いでリハビリに励まれました。でも、ここまでのものは作れませんでした。上手にまた作品を送ってくださいました。



図67

単にその方をどうお世話するかといったことではなくて、その方を必要とする他者の思いが人を元気にするのだと、改めて実感します。

これは京都のKさんという男性のわらじです(図68)。彼は若い方にもこのわらじづくりを教えるのが大好きです。小さいのは水引で作ったものです。彼は編み方を教えたり、履き方で教えてくれて、頻繁にちょっとしたワークショップを開いてくださって、それは若い方との交流の場にもなっています。



図68

これは山形から送ってもらった繭玉のブローチです(図69)。作品の素材は地域を反映していて、そんなこともいいなあと思っています。



図69

体が不自由になったときに、ともすると我々はその方をどうお世話するか、何を補ってあげるかばかりを考えがちですが、人はお世話されて生きていくものではないのです。この作品の収集はその方がその方らしく生きていくためのちょっとした試



図70

みです（図70）。

これは高齢者の作品の展示即売会などなのですが（図71）真ん中で背中が丸くなっているHさんは要介護1なのです。Hさんの作ったものはすごく人気があって、彼女も友人たちに自慢しながら、「これを見て、見て」と言っていっしょる、そんな日です。



図71

人は不自由になったところをお世話される。そうではなくて、その人が地域の中で求められるような試み、それをあれこれできないかと思っている。それが私の仕事です（図72）。

老いに寄り添う仕事

いつまでも住み慣れたところで生きる

図72

道具を使ってどんなふうにご自分らしく暮らしておられるか、出会った方々のこととお話させていただきます。

私が仕事を始めたころからのお付き合いがある方から、「うちのお母さん、トイレまで行けなくなったんです。そこでポータブルトイレを選んでほしいんですが」といった相談がありました。こんなときに「はい、このポータブルトイレがいいですよ」となどと簡単に選んではいけないのです。そこでお母さんの様子を知るためにお家に伺うことにしました。お母さんは加齢による筋力低下が見られるとのことでした。

家に伺って驚いたのは、天井から無数の紐がぶら下がっていたことです。その紐はお母さんが寝ているベッドまで続いていました。当時お母さんは不要になった息子さんのベッドに寝ていたんで

す。

お母さんにお話を聞いてみると、天井から吊した紐につかまって、身体を起こしているとのこと。確かにその紐の先には輪がついていました。それから紐を伝ってトイレまで行っていたそうです。ところがひと月ほど前からトイレが間に合わなくて、困っているというのです。お母さんからお話を伺って、お母さんは身体を起こすことに体力を使い、消耗しているのではないかとすれば電動で背中が上がる介護ベッドを使えば、トイレまで行けるかもしれないと思ったのです。当時は高齢者にはいくつか条件がありましたが、日常生活用具の給付というのがあり、介護ベッドもそのなかにありました。それで試していただくことにしたのです。

電動で背中を上げると、お母さんはその後自分でトイレまで行かれました。お母さんは「これがあれば自分でできる」ととても喜んでくださいました。このお宅は狭いのですが、ふすまに民生委員さんの電話番号が大きく書かれていたり、財布は天井からつり下げた袋に入っていたり、様々な工夫がありました。私も本当に参考になったことを覚えています。

もうお一人、Nさんのことをお話させていただきます。

Nさんとも長くお付き合いをさせていただきました。彼は学校の先生でしたが、定年で退職してからも講演や執筆など、いろいろな仕事をされてきました。その後、多発性脳梗塞で何度も入退院を繰り返され、私たちはその都度車いすなど、福祉用具の相談にのってきました。そしてある日、家族から「淡路島にある家を車いすでも使えるようなものにしたい」という相談がありました。

聞けばNさんはずっとこの家には行かれていないそうです。海が見える素敵な家で、Nさんが大好きなところでした。それならNさんも一緒に行けないかと進めてみました。いろいろ考えられたのちに、「それならみんなで行きましょう」ということになり、Nさんご夫妻や娘さんそれに私たちも一緒に行くことになりました。もちろんお医者さんの許可もいただきました。

車いすがそのまま入る車を借りてドライブの末、家に着きました。そこでNさんはご夫妻でゆっくり過ごされ、翌日は、海が見えるデッキで朝食をとられました。Nさんはとても体調もよくて、しっかり食事もされたのです。そしてその日、無事家に着かれました。Nさんが使える車いすがあり、部屋にはNさんにあったベッドやポータブルトイレがありました。だからこそ、Nさんはこの家で過ごすことができたのです。

その後、3ヶ月ほどしてNさんは亡くなりました。訃報を聞いて私はご一緒した日のことを思い出していました。

人は誰でもいつかは亡くなってしまいます。だからこそ住み慣れたところで、人がその人らしく老いて亡くなっていく、そのことを考えなければなりません。このような意味で「介護」を捉えかえすなら、失いかけている地域の共同性を取り戻すことが必要だし、「老い」や「介護」はそのきつ

かけになるのではないかと期待さえしています。

自分の仕事の報告になって恐縮ですが、「介護」というものをいわゆる稼ぎの仕事ばかりにはせず、広い意味で地域に戻していけたらいいと思っています。

雑ばくな話になってしまって、申し訳ありません。これで話を終えたいと思います。どうも有難うございました。

(内山) ありがとうございます。何となく報告を聞いていて、特に討論しなくてもいいのではないかなという気がしてしまいました。最後に浜田さんからあったように、私たちは生きる形というのをひょっとすると見失っているかもしれない。スケジュールをこなすとか、そういうことばかり毎日やっていて、生きる形を持たなくなってしまったというか、そんな時代かなという気も少しいたしました。

最初の方であった大熊さんの話ともつながってきますが、自然とともに生きていく形というのも私たちは失ってしまったし、また、生きる形を作っていこうとすると、どういう仕事の仕方が必要なのかとか、そういうのも見失ってきたような気もいたします。そんなことを感じながらもですが、せっかく今日は富山でこれが開催されておりますので、この富山という地域を考えたときに、西頭さんから富山が持っている標高差 4000m という世界の中に、これも私たちの生きる形といいますか、どういうふうに使っているのかという問題提起もあったような気がいたします。

多分これから私たちは忘れていたものを少しずつ取り戻していかないといけない時代になってきていて、それは先ほどの生きる形というものもちょっと忘れかけていたので、もう一度つかみ直してみようということだと思っておりますけれども、自然とともに生きる形も取り戻さなければいけないし、それから、歴史、文化、地域、そういうものと生きていく形というのでしょうか、そういうものを少しずつこれから取り戻していかないと、私たちはだんだんだんだん追い詰められていくばかりという感じがしてしまいます。

ついこの間まで日本で最も景気の良かった地域というと、愛知県が必ず紹介され、確かに有効求人倍率とか、そういう数字を見ますと素晴らしく高かったのです。ただし、あまりにもトヨタ 1 社におんぶしてしまったといいますが、今ちょっとトヨタがこれまでのようにいかないというか、そんな感じが出てきただけで、この間に各種の数字が劇的に落ちこちてしまった。こういうのを見ていても、企業城下町的な地域ならどこでもそうですが、生きる形をひょっとすると見失っていたのではないかと。数字を上げる形は確かに作っていた。その数字は景気がいいといわれたような数字を上げていた。ところが、その数字がちょっと上がらなくなった瞬間に、生きる形を失った地域に移ってしまったという場所が各地に生まれてきているように感じます。

ですので、はじめに 4 人の方に話を聞いて、ほかの方の話を聞いての感想とか、あるいは付け加

える意見とかいうことを含めまして、ここに絞りまして、私たちがこれからの生きる形をつくっていく場合に一体何を回復していかなければいけないのかということ念頭に置きながら、ちょっと感想などがありましたら大熊さんから頂けるでしょうか。

(大熊) 浜田さんのお話を聞いて、私の母が今93歳です。それをずっと考えていて、どうしようかなと思って、今は施設に入っているのですが、やはりみんなで生きる形をつくってあげていないのだなと反省しながら聞いていまして、しゃべりようがないね。だから(笑)。

先ほど言いそびれたことで、実際に昔川で子どもが死んでいるのです。フェンスを外すというときに、「危ないから駄目だ」という亡くなったお姉さんがもう50歳は過ぎていると思いますけれども、フェンスを外すことに反対されたそうです。今の行政だと命が危ないと言われると手も足も出ないということですね。しかし、よく考えたら、川より道路の方がもっと危険ではないか？道路を歩いていて、自動車が飛び込んで子どもが死んだなんて幾らでもあるという中で、道路に対してはみんな許容しているのです。そういうことを、川に対しては絶対に許容しない。だから、先ほどの新しい住宅ができたところはフェンスを作れと言ってくるのです。

だけど、フェンスを作ってしまうと子どもたちが楽しく遊べないではないかということ。そこで、命というのを本当にどう考えたらいいのかということで、先ほど内山さんが命が見えなくなっているということを言われたわけです。一方で見えなくなっていて、ものすごく命に過剰反応するといったことになってきているのかな。その辺は私はどうもうまく答えがないのです。

われわれがフェンスを取り外すときには、道路も一応交通ルールがあって、横断歩道を渡るときは手を挙げて渡りなさいなどと小学校できちっと教えているわけです。だから、川に関しても三つぐらいでいいからルールを作って、その三つを守ることでフェンスを取ろうということ、それが実現できました。三つといたって簡単なのです。一人で近くに行かないとか、杭が打ってあって、杭から先は深いから、そこに行かないと。それから、もう一つは雨が降ったら近づかないと、これぐらいの三つのことですがけれども、三つぐらいのルールを作って、何とかフェンスを外すところにはこぎ着けたのです。

命というのをどう考えていったらいいのかということで、それをちょっと感想として先ほど言いわすれたものですから話させてもらいました。

(鬼頭) 今フェンスの話があったので、今まで結構そういう危険性があったり、それこそ洪水の話もそうだと思うのですけれども、そういうものがないことをずっと求めてきたわけです。それはもちろん安全性を確保するということが大事なことだったのだけれども、それをあまりにも過度にやりすぎたということもあるし、私の先ほどの言い方をすれば、そういう形で人間の思いどおりに

すべて管理し切れると思ってやってきたことがそういうようなことにつながったと思うのです。

だから、これからの時代というのは、これは管理し切れないというか、そもそも全部不確実性、不完全性の中で私たちは生きていけないということは、むしろそういう多少のリスクというか、今まですべて全く分からない、全くそういうリスクを負わないという話ではなくて、いい形でリスクをみんなで分かち合いながらうまくやっていくようなことを考えていかないと、結局、駄目なのかなという感じがします。

浜田さんの話を聞いてみても、自然に対するのと非常に共通性があって、介護する側とか、そちら側から便利なような形で考えてしまうのだけれども、結局は人間の非常に自然な生き方とか、人間が人間らしく生きるということを支えんようなものになっていないわけです。ですから、どこにでも普遍的に何でも通用するとかということではなくて、現場、現場の中でうまくやり切っていくようなことを考えていかないといけないのかな、そういうところに仕事というのはあるのかなと思いつながりながら聞いていました。

(西頭) 先ほど浜田さんのお話を聞いて、介護を全然知らない人に来られると、嫌だろうなと思いつながりながら聞いていました。

地域の中で生きることをみんな見失っているというのは確かにそうなのですが、ちょっと卑近になって恐縮ですが、富山市にきんたろう倶楽部というボランティア組織があります。私は会長をやっているのですが、日頃あまり活動に参加できませんでしたが、この間、11月末に初めて実際の作業を行いました。皆さんもご存じの山田村で植林をやったのです。

これに参加してびっくりしたのは、私自身は昭和20年代には薪なんかないから、近くの里山に入り薪づくりをいたしました。それを思い出したのと同時に、そのとき参加していた某商社の方が私と一緒に仕事をしていたのですが、すぐ疲れて座り込んでいるのです。私は昔の経験を思い出して、スコップを使っていたのですが、私より若い40代ぐらいの人がへたばっているのです。硬い土にスコップを何回も打ち込み、一人で10本ぐらい植えるということなのですが、その方は2本も植えたらへとへとになっていたもので、「疲れたでしょう」と言うと、「疲れた。しかし、こうやってみんなと一緒にやっていると楽しい」と答えられた。昼飯になったらその人はたくさん食べていました(笑)。

私が一番言いたいのは、昔、当然あった地域とのつながりの中で共同作業をしていたことが全くなくなってしまったという現状です。私はたまたま参加して、それを実感しました。そういうものを介護だけではなくて、いろいろなところで回復しなければならないと思います。

(浜田) 先ほど老いなどを中心にもう一度地域の共同性を再構築できたらと言いましたが、そのためにはいろいろなことが必要です。10年ほど前にできた京都の家なんかは公団住宅でもマンショ

ンでも、門扉まで付いて、人を寄せ付けないような家づくりなのですね。そうではなくて、人が入りやすいような、人がお互いに行き来しやすいような家はどうあるべきかとか、地域にこんな場所があったらいいとか、そんな意味で具体的にあれこれ仕掛けも考えながら、できたら経済もそこで動いていくような仕組み、そして、今だったら人が亡くなるのは施設か病院が圧倒的に多い中で、死をちゃんと自分たちのものに取り戻せるような仕掛けが地域の中で必要です。

地域は元気な人だけのものになっているのが非常に不満で、誰もが老いて、誰もが確実に亡くなる中で、しかし死ぬことさえ見えなくなっている地域をもう一度変えていくこと、それから、お金のこともそこで動くようなことを考えていく。子どもは親のかすがいと言われますが、老いとか障害が地域のかすがいになるような形で何かができたらいいなということを思っています。

(内山) ありがとうございます。以前、僕がフランスのピレネーの山村で釣りをしていて、僕はあそこは釣り場として好きなのです。その村では、子どもたちが学校が終わるとわあっと遊んでいるのです。兄弟がたくさんいる。小さい村ですから、子どもたちは全部で20人ぐらいですが、恐らく10軒ぐらいの子どもたちです。だから、二人ずつぐらいが兄弟になっているという感じです。

みんなしてわあっと遊ぶのだけれども、いつも兄弟が手をつないでいるのです。そうすると、ものすごく不便です。というのは、例えばお兄さんとかお姉さんが小学校5年生として、その下の子どもはまだ5歳とか、あるいは小学校1年生で体力差がものすごくあるわけです。それを手をつないでしまうから、走っても当然ながらスピードがまるっきり違うのです。そうすると、お兄さんとかお姉さんの方は下の子どもにスピードを合わせないといけないし、サッカーなんかをやって遊んでいるのですが、サッカーをやっているときも手をつないでサッカーをやっているのです。だから、ものすごく不便というか、大変なわけです。その子どもに「君たち、いつも仲良しなのだね」と言ったら、「これは僕の仕事ですから」と上の子が言っていた。つまり、「弟とか妹の面倒をみるのは僕の仕事です。だから、当たり前です」みたいなことを言っているのです。

あるとき、夕方に釣りに行こうとしたら、ホテルの前にまさにその兄弟が立っている。「一緒に釣りに行ってもいい？」と言うから、「ああ、いいよ」と。6月ごろかな、なかなか日が沈まないのです。向こうは夜の11時半ぐらいまで釣りができる。そうしたら、なかなか帰らない。一緒に手をつないで二人してやってきて、8時ぐらいになってきて、「そろそろ帰らないと家の人心配しない？」と聞くと、「今日は手をつないでいる仕事は残っていますけれども、ほかの仕事は終えてきているから、今は僕の時間だから大丈夫です」とかえらい生意気な子なのです。「仕事って何」と言ったら、ニワトリの餌をあげるというのが仕事らしくて、学校から帰ってきて、ニワトリの餌をあげているから、もう仕事のオフタイムだから私の自由ですと。

片側で手をつなぎながら、片手で釣りをやっているからなかなか釣れないのです。でも、最後ま

でそういう調子でずっとやっていて、「僕の仕事ですから」と。みんなそんな感じなのですね。あれを見ていてつくづく思ったのは、日本の子どもたちというのは役立たずになったのだなということです。それは子どもが役立たずになったのではなくて、役割を与えなくなった。あるいは役割が勉強だけになっている。それに対してピレネーの子どもたち、ちょっと仕事を与えられたことによって胸を張って遊んでいる。だけど、その遊びの中でもこれは仕事ですからということで弟とか妹の面倒をみている。ここに本当に命を結び合いながら生きているというのが基本にあるななんていう気がいたしました。

そういう情景もちょっと私たちは忘れてきて、それから、同時に人が集まっているときでも、先ほど西頭さんがおっしゃっていたけれども、私たちの身体性みたいなもの、体みたいなものを介して共同的なものを作っているととても強い。村の結（ゆい）はみんなそうで、みんなして体を持ち寄って共同の仕事をしている。ところが、頭だけ持ち寄ってグループを作るとたちまち破綻してくる。うまくいっているときはいいのですが、問題が起きるとすぐに駄目になっていく。ここら辺にも何かあるなという気はいたします。

もう一つ感じていることは、この間にうちの来年3月卒業予定の大学院の学生が、ちょっと寂しくなっていて、「4月が過ぎたら、私はどうしているかな」みたいな感じのことを言っていたので、「心配は要らない。間違いなく息はしている」と言ったら、「それだけですか」と返ってきました。

息をしていることの持っている深さを僕らは忘れてしまっていて、別に息をしていることをありがたいと思えと言っているわけではないのです。本当に息をしながら生きているという世界の持っている深さを忘れてしまっていて、特別な計画を作って、その計画に向かって邁進しているみたいなものもいいことで、息をしているだけでは、ということになってしまった。息をしているという言葉は息だけではなくて、結局、息をしていられるということは、そこにいろいろなことが絡まっているわけですから、その持っている深さみたいなものも忘れてきたような気がして、私たちはある意味で生き方そのもののリハビリを必要としているという時期に来ているような気がしています。

追加的にご発言のある方はいらっしゃいますか。

（大熊） 先ほど阿賀野川の埋もれた木が東本願寺に行っているという話がありました。新潟に木揚場（きあげば）教会というのがあるのです。それは浄土真宗の教会なのですね。教会と付いているからはじめは何なのかなと思っていたら、浄土真宗のお寺なのですね。言ってみれば。ただ、坊さんがいないのです。そこで木を集めて、東本願寺に送った拠点だったのですね。その話を聞いて、「ああ、そういうことだったのか」とつながって大変良かったなと思って、皆さんには関係ないかもしれないけれども、私だけ一人面白かったということで感じました。

(鬼頭) 役割ということなのかどうか分からないのですが、先週私は、仙台の隣町に川崎町というのがあるのですが、そこに行ったのです。最近まきストーブが結構どこでもはやっているのですが、まきストーブをやるためにはまきを取っておかなければならないのです。川崎町の山林が荒れているというか、そんなふうになっているので、それを管理しながらやろうという形で、みんなで黙々と作業する会で面白いのですが、それで行ってきたのです。

そのときに仙台のホームレスの人たちを支援するグループと連携していて、そのホームレスの人たちはなかなか仕事がなかったりするのですが、それこそ普通にもらったりというよりは何か仕事をしたということがあるので、多少山でそういうようなことができる人たちを集めていったのです。地域の人たちはホームレスの人が来るということで、最初は非常に嫌がったというか、そういうのはやめた方がいいのではないかという感じだったのです。いったん来てやったら、すごくみんなきちんとしてという変なのですが、当たり前ですけども、黙々と仕事をして、もちろん食事をみんなで出して、何がしかのお金を少し差し上げてという感じだったのです。それでも大歓迎という感じだったのです。

今はそれこそ本当に仕事がなくてという感じなのだけれども、むしろ仙台みたいな大都市だと仕事がないのです。でも、実際に川崎町とか郊外になってくると山の管理ができなくてという話です。今は、だから、そういう山の管理をして、そういうものを地域貨幣で回してうまくやれないか。今までだとそういう山の管理をするというのはボランティアみたいな感じなので、ボランティアだとうまく続かなかったりするけれども、みんなまきストーブを持っていて、自分のまきを取らないといけないので、ほとんど自分のまきを取るために行くという感じで、今までボランティアで山を管理するのと違うような形で展開していて、これは面白い形になるかなと思って帰りました。

今、役割という話もあったし、仕事とか、まさに大都市と郊外の方というか、地方の都市の中の働きということを考えると、結構興味深い事例だなと思いながらお二人の話を聞いていました。

(大熊) 今、まきストーブの話が出て、実は私のところもまきストーブなのです。われわれがNPOで川沿いに勝手に植えた木があるのです。法律違反なのですが、勝手に植えた木が大きく育って、役所からあの木をちゃんと管理しろと言われてまして、みんなで木を切りまして、その切った木をわが家に持ってきたのです。それをまきにするのですが、内山さんはよく知っていると思いますけど、まきを作るのというのは簡単ではないのです。結構労働で大変なのです。切ったり、割ったりして燃えるようにするというのは相当な労力があるのですけれども、やってみるとすごく充実感があります。だから、石油ストーブでボタン一つでぱっとつくのは本当に便利でいいのだけれども、充実感がないのです。

私はまだそれほど肉体が強固ではないのですけれども、内山さんの裸をまだ見たことないのだけど、多分あれを脱ぐと、肩の辺は筋肉隆々としていると思うのです。だから、自然の中で何とか共生しようとしていると、本人自身も肉体が強くなり、周辺の人とも仲良くなっていくということだろうと思うのです。

私の場合もまきストーブにしたおかげで、私はまだ一回もまきを買っていないのですが、勝手にまきが運ばれてきて、私はそれを加工するだけなのです。だから、そういう輪ができてくるということでは面白いのかなと思っています。

(西頭) 皆さんがおっしゃるから、私も一言。高度差 4000 は資源が循環しているということですが、もうちょっと別な言葉で言いますと、平面的には、いろいろなところと連携し合っているということ。

例えばこういう話がありました。砺波市の人から聞いたのですが、先ほど鬼頭先生からきれいな水田の中の屋敷森の話がでましたが、最近空き家が出だしているようですね。非常にもったいない、何とかあそこを活用したいとおっしゃるので、私は、ヨーロッパの人でも、どこの人でもいいのですが、安く利用できたら、1、2ヶ月間滞在する人が出てきますよと言いました。これからは当たり前のような所が一番人気ができるのです。しかし、トイレと風呂と台所だけは清潔にしなければならぬと付け加えました。これは一つの事例です。

私は様々な連携をするときの一つのポイントは、コストをかけないことだと思います。例えば、これまでは交流人口を増やすために、道路を造りホテルを造る。そうではなくて、今のまま横との連携をうまくやって、例えばご飯を炊くのなら、山の近くの人が薪を供給するとか、そういう助け合いによってコストをあまりかけない。そうすると、来る人も安くあがりますからリピーターになる。結局、交流人口を高めることになる。

もう一点、この間旅館組合の人に聞いたことについてお話しします。大学の話で恐縮なのですが、富山市で学会を開くと、大きい学会になりますと 3000~4000 人が来県するのです。ところが、富山には宿泊のキャパシティがないのです。ですから、富山市でホテルがいっぱいになると、金沢市に行くという形になるわけです。ああいう場合にもっとうまくリレーションを持てばいいと思う。ところが、例えばAという組合はBという隣の組合とは連携していないのです。

湯布院が成功したのは、この温泉に来たい人には、私のところはいっぱいですが、他を紹介しましょうという形でどんどんお客を呼び込んだ。富山のホテルでは一つの町の中で交流をやっているのかどうか分かりませんが、ある人は、そんなことは全然やっていません、いっぱいになったら断りますと言う。「隣の町の旅館を紹介したら」と言ったら、「いや、そんなことはやっていません」と。

まず、この辺から変えなければいけない。これも横のつながりです。高度差 4000 の目指すのは、横のつながりの強化です。そういう意味で発想の転換という、「地域で生きる」と先ほど浜田さんがおっしゃったようなことを真剣に考える段階に来ていると思います。

(浜田) そう思いながら現状は本当に家族自身の関係が厳しくなっていて、これは社会学の春日キスヨ先生に聞いたのですけれども、今は一人暮らしよりも二人暮らしで、息子と介護が必要な親の二人暮らしが一番危険だそうです。どういうことかということ、息子が例えば失業し、仕事が無くなって、親に寄生して、親の年金で食べて、介護は一切しない。でも、親一人だったらいろいろな制度的な支援ができるけれども、息子がいるからと思って誰もご近所がのぞかないような感じで生活の中が見えない。そのため例えば息子は 2 階で暮らしているのに、1 階で死んでいる親が 1 週間後に発見されたなど、なまじ家族がいる方が怖いなんていう話を聞くと、本当にその家をどうやって開くのだという気がするぐらいです。

多分さまざまな根深いものがあるって、結局は稼ぎがその人を表現するような時代の中で生きてく中で、稼ぎを失った息子なり、その人自身が何重にも打ちひしがれてしまっていて、それは個人だけの問題ではなくて、やはり社会全体の問題で、貧困とかというのは本当に大きな問題を引き起こしているのだと思います。

そんな中で西頭先生のコストをかけないというのも、西陣にはものすごい技能が蓄積されていて、大体中学を出て、ずっと数十年かけているいろいろな織りの技術とか、例えば爪で綴れを織るということができたりする方々がいらっしゃいますが、それが自分の身を支えない西陣の中で高齢者たちも何重にも屈折しています。本当にその人がそんなことができる人ということさえ誰も評価してくれないような生き方をしている中で、もう一度その方々が持っている技能をきちんと地域で生かすこと。また、小さな家族で閉じている方々をもう一度どこかでばらばらにしながらまた地域に開き一緒に再構築していくとか、とても大変な道のりではあるのですが、そのことを考えないといけない時代なのだろうという気がしています。

(内山) ありがとうございます。これからのいろいろなことを考えていくと、最初に大熊さんがおっしゃったことですが、例えば河川でもプロの技術者だけが暴走していくといろいろな問題が起こってしまう。アマチュアといっても、実はかつて河川とかかわってきた地域の人たちというのは完全なアマチュアではなくて、地域のプロなわけです。その人たちと結んで初めて本当の仕事ができる。だから、一つはプロの仕事とは何か。いわゆる今プロというと、例えばこの間の国際金融で債券を売りまくっていた人たちはまさにプロのはずなのですが、その結果は見事に今日の事態になっている。そうではなくて、地域とともに生きた人たちもプロ、この人たちの仕事は何だったのか

を、みつめ直さないといけない。

もう一つは、アマチュアの仕事もあって、そことどう結ぶかとか、いろいろな課題があるような気がするのです。先ほど茅場の話がありましたけれども、群馬県には白川郷のような場所はないのですが、茅葺きの家がまだ残っていて、その中には文化財になっているものもありますので、茅は欲しいのです。水上温泉の谷川岳の近くの、その奥の藤原という長く茅場を作ってきた地域があります。ところが、その茅場の維持が難しくなってきました。放置しておくとも茅場は森に戻っていきます。一面では森に戻るのもいいのかもしれませんが、ただ、歴史的にずっと茅場として維持されてきた所ですので、何とかこの茅場を維持していきたいということで、首都圏のボランティアグループがそこを、茅場として使うということで地域と協定を結び活動をしています。

このボランティアグループがなぜ活動を維持できてきたのかといいますと、ボランティアグループが刈った茅を群馬県内の建設業者ですけれども、古い建物の技術を持っている一業者が全量は無条件で買い取るという約束をしているからなのです。刈った茅を道端に積み上げておけば、トラックで来て持っていきます。後で料金を払います。ただし、その料金は相場よりははるかに安いのですが、そのために活動が続いています。素人が刈ったものですから、その後でちょっと縛り直しとか、いろいろあることもあります。だから、少し値段が安いのです。

ここでは建設業者さんがいて、ボランティアグループに加わっている人は首都圏全域から来ているのですが、それと協力する地元があって、その三つがうまく連携して茅場の維持をしている。ですので、ボランティア的な活動もそうですけれども、どこかにプロが介在してくるときちょっとしたことができてる。また、この場合にはボランティアグループにも若干の収入があるということになってくるので、都合がいい。

こんなことを言っているうちに時間がだんだんなくなってきてしまいました。私たちが今まで了解していた、経済とはこういうものだ、労働とはこういうものだ、仕事とはこういうものだというものをもう一度根本から問い直していかなければならない時代を迎えているように思います。もちろん今日のような急激な変動が起るとその変動に対応できない人たちを大量に作りますので、そこでは対応できるための時間稼ぎや対策は絶対に必要です。契約社員でいた人が今月いっぱい住む所を退去しなさいみたいことが頻繁に起きていますが、これでは対応できない人々が生まれてしまいますから、当然住む場所をどうするかとか、いろいろなことをやっていかなければいけない。

その一方で考えなければいけないのは、私たちは本当はどうやって生きていったらいいのか、どういうふうに仕事をしていったらいいのか。そのときにポイントになってくることはどういう結びつきの中で仕事を作るかだろうという気がしています。それは自然との結びつきもあるし、地域との結びつきもあるし、文化とか歴史との結びつきもあるし、いろいろな結びつきの中でどういう自分たちの仕事を作り直すか。身に余るぐらい重い課題なのですが、その課題に対して答えを見つけ

出そうという覚悟をしていかないと乗り切れない時代が近づいているような気がしています。

これでこのパネルディスカッションを閉じたいと思います。どうも、長い時間ありがとうございました。

サプライズ企画

最後に、「“うさぎ追いしかの山”、つまり「故郷」を大切に想う気持ちがすべての出発点」という趣旨のもと、特別企画に出演された内山太一氏指導・内山節子氏伴奏により、ステージと観客席が一体となって、唱歌『故郷』（高野辰之作詞・岡野貞一作曲（大正三年））を合唱した。

（完）